

第7回「文芸思潮」エッセイ賞発表

第7回
文芸思潮
エッセイ賞

二〇一一年度第七回「文芸思潮」エッセイ賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。今回も日本国内および世界から四三八篇の作品が寄せられました。厚く御礼申し上げます。高校生から九十歳代までと、幅広い世代にわたったばかりでなく、地域的にも南北アメリカ大陸、ヨーロッパ、アジアと広く世界中からお寄せいただき、多彩で豊かな内容を変わずに示していただきました。これが一つのカラーとなってきた感があります。例年の通り、まず選考委員会予選担当による第一次・二次選考、続いて第三次選考が行なわれ、最後に三神弘、水木亮、都築隆広、五十嵐勉四人の選考委員によって最終選考が行われました。厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

今号には当選作および優秀賞を発表させていただきますが、以後奨励賞、入選作も、極力「文芸思潮」誌上に掲載させていただきたいと思っております。御期待ください。

第八回「文芸思潮」エッセイ賞は明年もほぼ同じ要領で募集する予定です。今回は社会批評賞に該当作がなかったため、次回は特にこの分野も期待しております。どうぞ奮って御応募ください。

「文芸思潮」エッセイ賞

当選「母と赤い鼻緒の草履」

夏木美子 (静岡県三島市)

優秀賞

「治癒力」 山口里佳 (東京都三鷹市)

「シロイルカ」秋元麻由子 (神奈川県横浜市)

「ひぐらしの晩餐」

西田昭良 (神奈川県横浜市)

「植物園の穴蟬」金田一淳 (青森県三戸郡)

「わたしのメルトダウン」

山田まさ子 (高知県高知市)

「アザラシ・ジヨセフィン」

ならはたかし

(オランダ・スヘルトールヘンボス市)

奨励賞

「残された手紙」 志村美子 (福岡県福岡市)

「暁に祈る」 六藍光洋 (兵庫県神戸市)

「闇を走る」 大島武弘 (熊本県上益城郡)

「硫黄島の叔父」 藤田陽子 (神奈川県厚木市)

「オリヤー！ サンマが翔んだ」 印南房吉 (神奈川県横浜市)

「あんばん」 天野美和 (静岡県浜松市)

「最後の晩餐」 田賀せいし (北海道石狩市)

「演奏家と日本人」 神戸優梨 (香港・ホンナム)

「鼻の記憶」 山崎人功 (長野県安曇野市)

「快適ライフを、手放す理由とは……」

佐藤義弘 (福島県いわき市)

「クマといた夏」 塩坂佳子 (東京都板橋区)

「昼火事」 森 幸夫 (福岡県福岡市)

「一本の赤松」 光城健悦 (北海道室蘭市)

「情景を接ぐ」 よすみこうすけ (大阪府高槻市)

「人生の終りの始まり」 小林理樹 (東京都小金井市)

「ワン、疾風のように」 稲垣徳子 (東京都町田市)

「沙羅双樹の花」 小林未知子 (北海道札幌市)

「卒園式の涙」 前岡光明 (東京都町田市)

「一飯の徳」 浜木綿 (東京都世田谷区)

「赤い花挿し」 飯島もとめ (長野県長野市)

「ある不死鳥の話」 アラン・キラブリユー (アメリカ・ワシントン市)

「マイ復興プロジェクト」

竹森莉花 (神奈川県座間市)

社会批評奨励賞

「牛の瞳」 池山弘徳 (宮崎県都城市)

「ラフレシア」 河東 翔 (埼玉県草加市)

「ノンブリンカの花」

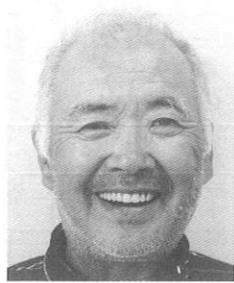
密 祐文 (和歌山県伊都郡)

「たかがITされどIT」

吉町利三 (北海道札幌市)

「組織と独歩」 西島雅博 (東京都三鷹市)

選評



みずき りょう

1942 北朝鮮生まれ
99 小説「祝祭」で第16回織田作之助賞受賞
2006 小説「お見合いツアー」で第49回農民文学賞受賞
07 小説「海老フライ」で第19回労働者文学賞受賞

充実していた戦争に関連するエッセイ

水木 亮

四三八編と昨年より応募数は減ったが、その内容は充実していた。総じて例年に比べて本数も多く、男性陣の活躍が顕著だったように思える。

最優秀に決まった夏木美子さんの「母と赤い鼻緒の草履」は、ここに描かれた事実の重みに圧倒される作品であった。おろかな戦争に巻き込まれ自分には何も罪もないのに、風評を恐れて被爆を世間に隠して生きなければならぬ母親。それを巡る家族の悲しい思いが惻々と伝わるよ

いエッセイである。死んだ妻のために被爆の申請をする夫と、妻がせめて安心して極楽に行けるように赤い緒の草履を編む夫が悲しい。それが作者の胸に六六年の歳月を経て生きている。

作者は「お前になにもしてやれなかった」という死出の母親の言葉に、将来看護婦になりたいと考え、看護婦として生きた。老いてこれを大震災の起こった今年発表された作者に拍手を送りたい。

この二度とあるべきでない被爆という事実が、大震災で再び日本に起こった。このことにより、将来この母親のように被爆を世間に隠して生きるような現実がないことを祈るが、果たしてどうか。先のことはわからない。原発を指導者の言うままに、お上の言葉に物言わないことを美德と信じた気のいい国民にも責任がある。その意味でもこのエッセイは時代に一石投じた意味がある。我々は生きていく以上、それがどのようなふうしようもない時代であり、自分の生きている時代から逃れることは出来ないのだ。

その他に私は秋元麻由子さんの「シロイルカ」、山口里佳さんの「治癒力」の上位入賞を考えていた。「シロイルカ」は今度の震災とダブらせながら、水族館のシロイルカを見つめる発想がユニークで、発見がありイメージの奥行きも感じられて興味深い作品だった。

また「治癒力」は、この時代人間は自らの生命力に不安

入選

- 「父の軍服」 宇田一絃 (東京都練馬区)
- 「母に鉄砲玉と云われた父」 黒田直隆 (東京都杉並区)
- 「初恋と珈琲と泪と」 都井 岬 (東京都渋谷区)
- 「おもえばかなう」 斎藤清昭 (栃木県那須郡)
- 「瞳」 さいとうみち子 (神奈川県横浜市区)
- 「宵闇の彼方へ」 榎並掬水 (広島県広島市)
- 「お父さんが家出した」 小野光子 (神奈川県秦野市)
- 「盆の唄が聞こえない」 大島直次 (埼玉県新座市)
- 「ぼーぼーと、トンカランドン、トンカランドン」 北上実 (新潟県新潟市)
- 「フロンティア・スピリッツ」 花笠香葉 (茨城県つくば市)
- 「祖母が登った木」 斎藤 望 (北海道紋別市)
- 「来年も是非とも」 山崎文男 (長野県上田市)
- 「石川啄木を尋ねて」 小林俊英 (神奈川県横浜市区)
- 「心病む友は」 苑田有子 (広島県広島市)
- 「風花のなかで」 秋元宣壽 (北海道河西郡)
- 「がいな女人」 鈴木綾子 (徳島県小松島市)
- 「心の眼」 ラファティール恵 (アメリカ・ワシントン)
- 「草食む男たち」 ひろ凜人 (東京都中央区)
- 「傍観者」 守屋正雄 (東京都町田市)
- 「めげるな 逃げるな 比べるな」 三宅直子 (東京都調布市)
- 「鮎の腐れ鮨」 山中好子 (愛知県海部郡)
- 「ラブメモリー」 宮坂 新 (長野県諏訪市)
- 「庄介物語」 雨森ユウ (福岡県春日市)
- 「気づき」 山吹たかし (東京都東久留米市)

- 「悔いなし、わが人生」 小佐美智子 (兵庫県神戸市)
- 「一人っ子でも、愛されない」 倉田紗緒里 (千葉県船橋市)
- 「佐藤君の思い出—ジョン・レノンの皿を洗った男」 水澤政人 (ブラジル・サンパウロ)
- 「目覚めへの旅」 高木 都 (埼玉県さいたま市)
- 「朧月夜」 小椋よしこ (埼玉県さいたま市)
- 「猫が結ぶ糸」 大西峰子 (埼玉県新座市)
- 「母がくれたもの」 田中真子 (東京都八王子市)
- 「死の商人の贈り物」 竹中水前 (東京都葛飾区)
- 「いま甦る、遠い日の友情の歌声」 清水紫 (北海道札幌市)
- 「しなやかに したたかに生きる」 林直子 (京都府城陽市)
- 「老いた夫婦のかたち」 世波場葉 (神奈川県横浜市区)
- 「お父さんからの手紙」 おとたけみか (東京都世田谷区)
- 「桜に逢う日」 中奥英子 (愛媛県東温市)
- 「サシバ」 井上幸子 (岡山県津山市)
- 「子供の海」 遠 優 (京都府長岡京市)
- 「残しておくべき重要な記憶」 中岡司右一 (大阪府富田林市)
- 「耳そうじ」 石園和枝 (愛知県名古屋市区)
- 「復興競輪」 龍野 健 (滋賀県大津市)
- 「虚空を往く魂 青木繁」 清田 進 (福岡県福岡市)
- 「天神川の白い砂」 吉田宏子 (宮城県仙台市)
- 「父の手」 石田美佳 (東京都中野区)

社会批評賞入選

- 「才を好む悪魔は」 磯山正玄 (宮城県黒川郡)
- 「ムラ社会の殺ス文句」 佐藤メタル (神奈川県川崎市)
- 「少子化対策に物申す！」 奥水 茂 (神奈川県川崎市)

を感じて、何かに頼ろうとする傾向がある。作者はアロエを例にとりながら人間本来が持っている治癒力を回復すること、生きようとする生き方の暗示がよかった。今一度人間の基本に帰る物の見方に日常生活の一つの発見を感じる。これらの二本のエッセイは優秀賞になったが、共に何らかの発見や、日常生活を見つめ直すことで意味を問う、前向きな姿勢に好感がもてた。

また今回は戦争に関わる作品によいものがたくさんあった。そこでそれらは「水木亮のワンポイントエッセイ講座」の中で触れたいと思う。ここでは特に印象に残った作品名をあげておきたい。

「父の軍服」宇田一紘。「暁に祈る」六藍光洋。「最後の晩餐」松川正志。「鼻の記憶」山崎人功。「あんぱん」天野美和。「一飯の徳」浜木綿。「残しておくべき重要な記憶」中岡司右一。「ひぐらしの晩餐」西田昭良。「硫黄島の叔父」藤田陽子。「残された手紙」志村美子。「いま甦る、遠い日の友情の歌声」清水紫。などである。

その他に動物に関わるエッセイも楽しく、明るく、悲しい作品も見られた。

「クマといた夏」塩坂佳子は、そのタイトルの通り南の島で一緒に暮らした、ゴールデンレトリバーのクマという犬とのふれあい生活が、南の島の明るい風光の中で、生き生きと活写されていて楽しかった。



みかみ ひろし

作家
1945 山梨県甲府市生まれ
法政大学中退
1982 「三日芝居」で
すばる文学賞受賞
著書「三日芝居」
「花供養」
「月と五人の男」

書き加えられる「現実」

三神 弘

全国から寄せられた作品を読み進めていくと、日本の今日を、現実を、あらたにさせられていく。何よりも、人に出会った、というところも気になる。また、今回の、災害、飢饉、略奪、病苦、差別といったテーマは、かつての書物の記述や、絵巻の風景と重なって、歴史が、今日と地続きであることを疑わせない。

情報化といい、何ごとも明るく、見通しのよい時代とされるが、寄せられた作品には、作者一人一人が引き取っている現実がある。ここには、たとえていえば、あたりまえとされていることごとを、自分の眼の前において、見詰めて直している姿勢がある。さらに、自分の言葉で表現しているという意志がある。つまり、言葉は声となって、耳を澄まさせられる。

「傍観者」守屋正雄は、怪我をした犬の話したが、それを傍観している人と、助けようとした人が描かれていて、日常の事故が人の有り様を考えさせてくれる。

「ワン、疾風のように」稲垣徳子は、捨て犬の「ワン」と暮らした日々の生活を振りかえる。叱られて行方不明になった「ワン」をやつと探すが、事故にあい病院に運び込まれた。六ヶ月もその病院にいたのは、医師がこの犬は可愛がられていたことがわかる。だから飼い主がきつと見つけていると感じたからだという。主と再会したワンは俯いていたという。浪花節のような話で、動物好きには泣けるエッセイである。

動物以外で、「鮎の腐れ鮎」山中好子は、近所の女性達と母親が作る鮎の話だが、その時の情景が微笑ましくまた具体的に描かれている。その鮎を食べてみたくなるような、温かい母親の味を思わせる一編である。

毎年エッセイをたくさん読ませていたのだが、とても参考になる。そして毎年心に残る作品が記録されていくことは楽しみである。来年はコンクールも八回目になるが、そのうち「文芸思潮」エッセイコンクールの、ベストエッセイ集登場を期待している。他社にもそういう企画があり、なかなか興味ふかい。とびきりのエッセイだけを集めたエッセイ集の発刊が楽しみである。

当選作の夏木美子「母と赤い鼻緒の草履」は、「福島原発放射能漏れ。そのニュースを耳にしたとたん、心が凍りつくような衝撃」を受けたことで、ペンを握り締めることになった作品である。福島島の惨状は「広島に投下させられた原子爆弾による惨状」をよみがえらせ、さらに、「福島の人たちが避難した先で、放射能がうつる」と差別されているという景色は、「被爆者」であることを隠し続けた「母の声」を、今日、また、忘れ難いものにしていく。

四十二歳で「息を引き取った」「母」は、広島市の「八月六日の出来事」を、一度も語ることもなかったという。作品では、この「母」はもとより、「父」「祖母」また、被爆手帳の申請にあたり、「証言になってくれそうな友達」それぞれ、生き方と態度が、読者に問いかけをしてやまない。あえていえば、ここに描かれた人物は、文学のなかにしか登場し得ない人びとである。

戦争、原爆をテーマにした作品は、日本の文学を独自なものにさせ、これまで絶えることなく書かれ、まだまだ、書き続けられていくはずだ。それは、書き加えられていかなければならない現実があるからで、これは、問うことを止めないということであり、問いは言葉を探させ、新しい形式を求め続けさせていくからである。そして、言葉は、言葉に繋がって、戦争が、原爆がどういうものであったのかを、なお、見極めようとする精神を衰えさせない。

当選作は、こうしたことを実感させてくれ、また、暗黙のうちに、作者の今日までの生き方をもうかがわせてくれる。つまり、作品の語り手であることを超えて、「母」の死後を生き抜いてきた登場人物として、読者を、もうひとつの物語に誘ってくれるからである。

優秀賞の金田一淳「植物園の穴蟬」は、少年時代に植物園で遊んだことを、五十年を経て懐かしむ作品である。穴蟬がよく観察され、また、転校したばかりの少年の環境も語られ、こころのありようも、感情も、穴蟬と同じように観察されているから、穴蟬に夢中になるその眼差しも、固有なものになっていく。つまり、少年の穴蟬が、見えてくる。また、今日というものが、過去と現在で成り立っているという作者の心境も、感慨深い。

優秀賞の西田昭良「ひぐらしの晩餐」は、集団疎開をした小学生達が「極度の食糧難に襲われ」、誰かが言い出した「ひぐらしは甘いぞ」の噂に、ひぐらし探しに明け暮れたという夏の記憶である。戦争さなかの小学生達を、精いっぱい、はつらつと、無邪気に、今日よみかえらせようと作者の態度に、それゆえに、戦争体験の苦澁を読み取ることができる。

優秀賞の山田まさ子「私のメルトタウン」は、いわば独り語りの、嘆き節である。足のおもむくままの旅だが、その演奏は、感情のままに抑揚し、身振りもあり、芸もある。



いがらし つとむ

- 1949 山梨県生まれ
79「流謫の島」で群像
新人長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売
新聞・NTTプリンテック
主催第1回インターネット
文芸新人賞最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館
文学賞受賞

戦争世代最後の燃焼として

五十嵐 勉

第七回のエッセイ賞は四三八篇と昨年よりも少なくなりややスリムになったが、海外からの作品は増えるなど、水的な広がりには定着してきている。

このエッセイ賞にはまた、毎年応募されてくる作品を通してなんらかの時代の風景や特徴的な雰囲気がおどくが、今年は地震・津波に触れたものと戦争の回顧が特徴的だった。

地震・津波の作品では、まだ被害に遭ってから四月三十日の締切まで日が浅いせいか、断片的な作品に留まっていた、本格的に本質を伝え、問いかけてくる迫力ある作品はほとんどなかった。あれだけの大きな事件・災害を振り返り、作品として熟成させるまでには書く者の安全や生活の

言葉こそ、人を導き、救っていくはずで、旅の先を思わせる。優秀賞の秋元麻由子「シロイルカ」は、水族館を舞台に、海と陸、シロイルカと人間を対峙させる構成で、人間の営みの通俗さ、卑小さ、また、平穏な暮らしにひそむ危うさ、不安を描いて平明だ。言わずもがなの哲学もないから、シロイルカへの憧れも、素直に伝わってくる。ただ、シロイルカとの架空の対話は気が利いているものの、顔面通りの意味しか伝わらず、暗喩にもなっていないから、工夫の余地がある。

優秀賞のならばたかし「アザラシ・ジョセフィン」は、語り手である作者を羨むばかりの体験記で、「そこへ」「それで」「そこには」「それが」「そのうち」という素朴な語り口調が、臨場感ともなり、推進力にさえなっていく。

優秀賞の山口里佳「治癒力」は、体験をまじえた自然治癒力の効能で、現代医学への批評にもなっているものの、作品が、語る手法から、論じる手法へと転換してしまいうところが惜しい。

文芸思潮の「エッセイ賞」は、文芸誌の可能性をひらいていく試みである。応募作品の優れた作品は、より多く、順次、掲載されていくが、これはコンテスタの経過報告というのではなく、今日の日本を、現実を、より身近にする媒体でありたい、という編集方針によるもので、敬意とともに、期待をしたい。

落ち着きも含めて、もう少し時間がかかると見るのが妥当だろう。次回を期待したい。

逆に戦争の時代を記した作品が今回特に多かったのは、これを体験した世代が、どうしても記録として残したい、そのために残された時間がもはやわずかであるという切迫感が背後にあるためだろう。若い世代にとっては、「まだそんなことを引き摺っているのか」「そんなことは古いこととて、現代では化石のようなものにすぎない。何をいまさら」と敬遠するかもしれない。しかし私が今回のエッセイ賞の応募作のなかで最も心を打たれ、内部に一つの力として吸収したのは、これらの戦争を題材にした作品群だった。

なかでも志村美子氏の「残された手紙」には感銘した。妊娠している妻を残して比島へ出征し戦死した夫の手記を綴ったものだが、残された筆者の、戦後もずっと再婚せず、愛娘を一人で育てて夫の遺志に生きる人生は、貫かれた姿がある。まだ見ぬ我が子を持って遺品の手帳に残された夫

★編集部奨励賞

- 「南の島の祭礼」 茶楠サリイ（千葉県八千代市）
「友よさらば」 七里彰人（愛知県安城市）
「吃音人生」 田桐 勲（愛知県豊田市）
「セイロンコーヒ」 牧野加夏（東京都大田区）

の言葉は、時空を超えて胸に迫ってくる——「切々と吾子を思い妻を恋ふ 悲しみと淋しさともつかぬ陶酔に浸る 吾が子の顔 妻の姿 一瞬切実な願望となって胸のうちに抱きしめる 会いたい 会いたい」と思ふ 美子よ我が瑛子よ 健やかに居よ……」ここにこめられた思いは、魂の領域に踏み込み、空間を超え、時代を超えて、人間の生きる永遠の炎のありかを示してくれる。末尾の短歌「仕草似る父知らぬ娘にその人を語る今宵は七夕の夜」も、深い思いが蔵されている。他の選考委員の支持が得られず奨励賞になったが、最も打たれた作品として、推挙したい。

当選作「母と赤い鼻緒の草履」（夏木美子）も戦争に關連している。これは原爆被害者の戦後の苦しみを赤裸に描いて、肺腑を抉ってくる。「母親が被爆者と知れたら、子供にいいことはない」という当時の風潮下で、被爆者であることを隠し続ける母親の無言の聲が、痛切に届いてくる。最後は浴びた放射能のため癌で死んでいくが、その引き継ぎを娘である筆者が将来への看護師の道として選ぶところに、深い感動がある。これが現在の福島第一原発の事故と重なってくる導入も生きていて、説得性を増している。

それ以外にも太平洋戦争を題材にしたものにはよい作品がたくさんあって、藤田陽子氏の奨励賞「硫黄島の叔父」も、全滅した日本軍の中の一人だった叔父との生き生きとした情愛を描いて、胸に残った。人は、犠牲になった人々の何

っている現代人の一面を浮かび上がらせている点は高く評価した。社会批評賞でもよかったが、前半の経験が生き生きとして点から普通のジャンルにとどめた。フレッシュユでさわやかな切れ味がある。当選作でもいいと思った。毎年動物ものには胸打たれる作品が多いが、オランダから応募された、ならはたかし氏の「アザラシ・ジョセフィン」は、人間の文明と母性の境目を映し出して、切なさで漂っている。背後にある海と大自然の厳しい姿が、生きるものの孤独を浮かび上がらせている点で、これまでにない動物ものの新しい味を出している。それは文明そのものを悲しく見つめるような、どこか筆者の生き方にも通底している匂いを帯びているところに、深みがある。

優秀賞「植物園の穴蟬」（金田一淳）も蟬の羽化と少年期のみずみずしい感性が相まって繊細でまばゆい追憶の光にちりばめられた作品になっている。「シロイルカ」（秋元麻由子／優秀賞）は海からの視点で書かれている点が新鮮だし、「クマといた夏」（塩坂佳子／奨励賞）も、鳥で自らの傷を癒した日々と動物のぬくもりが海の母性の包みとなって懐かしい時間を響かせている。「サシバ」（井上幸子／入選）も鳥の母性の厳しさとやさしさを醸し出して、いつそう自然の深さを感じさせる点で優れており、「ワン、疾風のように」（稲垣徳子／入選）も、「傍観者」（守屋正雄／入選）も、動物の命のぬくもりに私たち自身が温めら

かを負って生きるものであり、それとともに生きることが、真の人生の歩みを深めてくれる。これらの作品のどれも、そんな人生の奥深い面を見せてくれる。戦争によって変わってしまった父親の人格とそれによる親子の断裂を題材にした鋭利な作品「暁に祈る」（丸山忠雄／奨励賞）、死体のおいさを扱った「鼻の記憶」（山崎人功／奨励賞）、台湾における日本の敗北によって行き場をなくして心中する一家を扱った「最後の晩餐」（田賀せいし／奨励賞）、腹部貫通銃創の弾痕のある戦死した父親と、養父を扱った「父の軍服」（宇田一絃／入選）、出征兵士の心の襲を鮮やかに浮かび上がらせた「残しておくべき重要な記憶」（中岡司右一／入選）、チャンドラ・ボースを追いつけた新聞記者の父親を描いた「母に鉄砲玉と云われた父」（黒田直隆／入選）も、みな時代を超えて響いてくる肉声に満ちている。優秀賞の「ひぐらしの晩餐」（西田昭良）も、戦時下の飢餓のなかで蟬のはらわたを食べる話で、強烈なレポートになっている。こうした作品や声は、あと一〇年したらなくなっていくかもしれない。その最後の炎のような気がして、いつそう大切にしなければならぬ尊さを感じた。

これらとは対照的な若い世代の作品にも清新なテーマが提出されていた。優秀賞「治癒力」（山口里佳）は、アロエの治癒力の経験から始まって、それを一般に敷衍して科学工業技術の進歩による過保護によって自らの治癒力を失

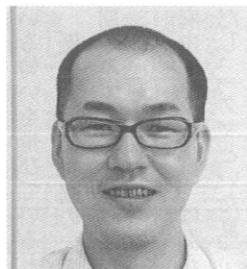
れる。

「あんぱん」（天野美和／奨励賞）は、まずしさのなかから立ち上がってくるやさしいまなざしがいい。「オリヤール！サンマが翔んだ」の漁業現場の発明は臨場感に溢れてダイナミックな爽快感があるばかりでなく、連続七回と受賞記録を延ばしているのは、賞賛に値する。

今年は社会批評賞に特に優れたものがなく、該当作がなかったのはたいへん残念である。池山弘徳氏の「牛の瞳」は宮崎県の口蹄疫を扱っていて牛への鎮魂に満ちていたし、「ノンプリンカの花」はチベットの弾圧の犠牲になる女性たちの声を痛切に描いていて、痛切なものがあつたが、具体性が乏しい点で、もう一つ及ばなかった。着眼はいい。その点「マイ復興プロジェクト」（竹森莉花）は地震によって浮かび上がる日本人の温度差を辛辣に指摘し、海外から戻って定住する日本人としての自己の足場を洗い直し再建しようとする視点は新しく、具体的で、強い問いつめがあつた。

このエッセイ賞で、様々な世界、様々な生き方、様々な見方や体験に触れるたびに、人生と社会の大きな生きものがつねに刻々と動き、苦悩や喜びを放ち生み出しながら息づいていることを感じる。今年は東北関東の大震災と津波で、その苦悩の褶曲はいっそう深まったように見える。それへの共感をも、深く大きくしながら全体を受け止めてい

くことが、目には見えなくても相対的な力となり、支え合う強靱な共同体の神経になっていくだろう。言葉による繋がりには、強固な絆となる。それをより鮮やかに表す作品を次回もさらに待ちたい。



つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ
東海大文学部卒
2002 「看板屋の恋」で第
91回文学界新人賞受賞
「狼を見る」（「文芸思
潮」）「ハンコの町の
家」（「三田文
学」）他
月刊「望星」書評員

筆先に墨をつけるように

都築隆広

福岡哲司さんが病氣療養中のため、ピンチヒッターとして審査員の末席に加えていただきました。でも毎年、下読みを一部、担当させていただいているので、初めてという感じがしません。僭越ながら選評を書かせていただきます。

まずは当選作の「母と赤い鼻緒の草履」。これは満場一

しかし、何か気になったので、他の方の判断も仰いで欲しいとメモに書いたところ、本選考では絶賛の嵐。あと少しで当選作になるところでした。結局、優秀賞には推薦するものの、当選作には反対という意見が私も含めて幾つか出て、この位置になりました。理由はこの作品がJ・コルタサル「山椒魚」という短編小説とよく似ているからです。

井伏鱒二の「山椒魚」はオオサンショウウオですが、コルタサルの「山椒魚」はメキシコサラマンダー、ようするにウーパールーパーの話です。ある青年が、水族館の水槽の向こう側にいる山椒魚に見惚れるうちに、シンクロしてしまい、山椒魚が自分なのか自分が山椒魚なのかわからなくなってしまう物語でした。偶然か意図的かはわかりませんが、こういうカルトな世界文学と似たエッセイを書いてきただけでも、本作は賞賛に値します。ですが、当選作にするかといわれますと、二の足を踏んでしまいました。「山椒魚」という既出の小説を越えるまでには至らなかつたからです。

同じく、「治癒力」も当選作候補として名があげりましたが、心ない読者が「当選作がアロエかよ！」というミもフタもないツッコミを入れたら気の毒だと思い、これにも反対しました。この作品は身近にあるアロエから議論を壮大に膨らませたところが評価できますが、後半の考察部分

致で決まりました。単体でも鑑賞に耐えうる作品ですが、奨励賞の「ある不死鳥の話」と読み比べてみますと、なかなか興味深かったです。「不死鳥」は作者と翻訳者がいる、いわば二人の人間が執筆に介入する合作で、翻訳エッセイでもあります。こうした手間のかけ方をしている応募作はなかなかありません。

一方、「母と」は、真に迫るエッセイではあるものの、文章としてはさほど上手ではありません。これが小説のコンクールでしたら、「不死鳥」の方に軍配が上がると思うのですが、そうは間屋が卸さないのがエッセイ賞の面白いところ。母とは実際に病み、死んでゆく人間とそれを看取る人々の痛みを記した、克明な記録です。一方、「不死鳥」では、主人公の苦悩と罪悪感を描かれているものの、ここで描かれた肉体的な苦痛は……靴擦れによるものでした。苦悩の深さと表現の上手さは評価できますが、「母と」の重さの前では、どうしても軽さは拭いきれません。エッセイには「だいたい、本当のことを書く」という暗黙のルールがあるため、「真実の重み」が勝負の行方を左右することがあります。原爆を落とした側と落とされた側の重みの差が、明確な形で審査にもあらわれてしまいました。

次に優秀賞の「シロイルカ」。実は私、下読みでこの作品を一度、落としてしまいました。

が少々、長いようにも感じられました。アロエと考察の比率が二対二ぐらいですので、これが二対一と、身近な話題の方を長くしてくれたならもっと評価できたと思います。

私が当選作に推したのは、「わたしのメルトダウン」でしたが、結局、優秀賞になりました。この作品には一刻も早く作者に送金したくなるような逼迫感がありました……というのは冗談ですが、「本編よりも作者プロフィールの方が面白い」という点は満場一致だったものの、内容も文章もハチャメチャで読者に対して失礼だ、という批判的意見も多かった。しかし、賞という枠組みを破壊するエッセイであることが評価できました。そしてもう一点、ここが重要ですが、実は作者はかなり文学や映画に精通した人物ではないか、という風に私には思われました。ギリギリの表面張力をもって書かれた文章が、随所に見受けられたからです。

また、「舞踏会の手帖」のクリスティース、「道」のジェルソミーナ、「かわいい女」のオーレンカ、作中に羅列された映画や小説に登場するヒロイン達が、読み解きのヒントになっています。彼女達の性格や境遇は違えど、いずれも、彷徨える女である点が共通していました。彷徨える女は日本の花柳小説のヒロインにも似て、男との間を行き来し、人生という旅に疲れています。そこに語り手自身をなぞらえ、彷徨える女の末路が描かれているとこ

第8回 文芸思潮エッセイ賞 作品募集

文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでもけっこうです。短文の世界に言葉の自由な翼をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は、「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。

文芸思潮エッセイ賞作品募集要項

主旨●随筆文学の顕彰によって文芸創作エネルギーを活性化する。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らしめ、文芸の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数作品応募者は失格とする）

応募資格●不問

応募規定●400字詰原稿用紙5～10枚（原稿用紙使用の場合は必ずA4原稿用紙を使用のこと／B4は失格）。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を閉じること。

別紙に①応募部門（第8回2012年度「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記のこと）②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日⑤〒（必ず郵便番号を明記のこと）住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらが厳守されていないものは失格となる。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと（コピー送付が好ましい）。★**応募審査料1000円**を郵便為替（何も記入しない）などで同封のこと。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」エッセイ賞係

TEL03-5706-7847 FAX 03-5706-7848

E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●エッセイ賞■賞状・トロフィー・賞金10万円

優秀作■賞状・賞メダル・賞金3万円

奨励賞■賞状・賞メダル 入選■賞状・記念品 団体賞●10篇以上（新設）

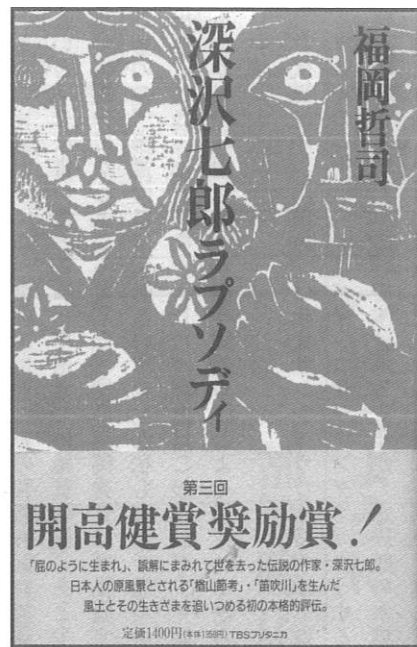
選考委員●三神弘・福岡哲司・水木亮・五十嵐勉

締切●2012年5月1日（当日消印有効）

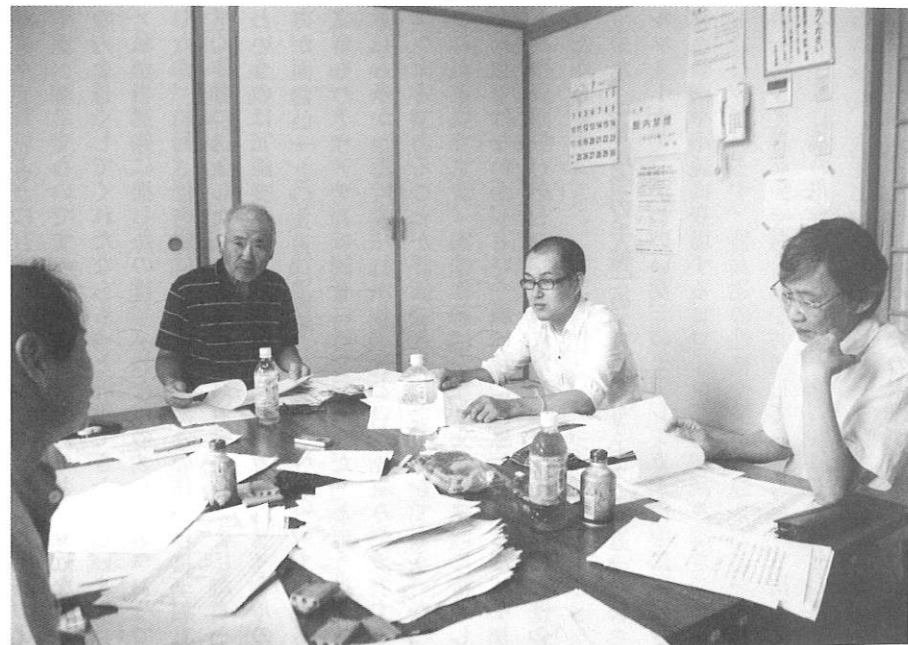
発表●予選通過者発表は2012年7月末発売の「文芸思潮」46号夏号、またインターネット・ホームページでも行なう。最終発表・受賞作は2012年9月末発売の「文芸思潮」47号（秋号）に発表掲載。優秀作・奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●アジア文化社「文芸思潮」

※主催者から 日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、短い文章でなければできないあなたのエッセイ作品をお寄せください。



ろに、このエッセイの奥深さがありました。さて、最後に総評めいたことを書きますと、今年は戦争モノの良作が多かったです。私も含め、文芸思潮には……意外にも、若いスタッフが何人か関わっているのですが、そういった作品は世代に関係なく、多くの支持を集めていました。おそらく、東日本大震災を経た現代の状況が、戦中戦後の社会情勢とよく似ているからなのかも知れません。文章技術も重要ですが、この賞では時代を切り抜く感性と、真実の重みがあるのをいいます。書家が筆先にたっぷり墨をつけて書を書くように、作者が自分の人生を丸ごと原稿にぶつけることで、名エッセイが生まれてくるのです。



2011.7.29 選考会風景

母と赤い鼻緒の草履

夏木美子

福島原発放射能漏れ。そのニュースを耳にしたとたん、心が凍りつくような衝撃が走った。六十六年前のあの日の事が蘇る。昭和二十年八月六日。広島に投下された原子爆弾による惨状。二度と再びあつてはならないことが、起きたというのか。呆然とテレビの画面に見入った。

そしてさらに胸が押しつぶされそうになったのは、福島の人たちが避難した先で「放射能がうつる」と、言われたという。なんと無知で根拠のないことを。いわれのない差別とはこのことだと、怒りを通り越して、空しさが広がる。

目を閉じると、亡くなった母の声が聞こえてくる。「母親が被爆者ということが知れたら、子供にもいいことはない。あなたの就職や、結婚にも差し障ると思うて、ずっ

と黙ってしまったよ」

母が被爆者であることを隠してきた理由はそうだった。八月六日の出来事を、一度も語ることなく母は逝った。

私が生まれ育ったのは、広島県の県北の田舎町だ。原爆投下から五年後に生まれた。広島市から遠く離れているので、被爆している人がいるとは、思ってもみなかった。あの日、祖母と父の会話を耳にするまでは。

四十四年も前のことだ。私が高校二年生になってすぐに、母は直腸に腫瘍が見つかり、広島市内の病院に入院した。付き添っていた父は、農繁期でもあり、家に戻ってきた。母の容態が知りたくて、祖母と私は納屋にこもりつき

りの父に、「お母さんの具合は、どんななかね」と声をかけた。

父は薄明かりの電灯の元で、筵むしろの上に胡坐をかき、わら草履を編んでいた。

「直子の手術は終わった。あちこちに転移していて、手の施しようがないと先生に言われた。もう長くは生きられない。傷の治りはいいんで、起きて歩いてみてはどうかと言われるんじやが、歩こうとせん。足を使わんと、筋力が落ちると言うても、動かんのじや。草履を履かせてみようと思うて、編んどの。足に馴染むから、草履が一番履きいいと言うとったよのう。病室を歩くにはよかろう」

父は手を休めることはない。

母の病状が悪いと聞き、胸の鼓動が激しくなった。涙がこみ上げてきて祖母にすがりついた。さらに続けて父は、思いがけないことを告げた。

「直子は、自分の体は原爆に遭うて、放射能を浴びているというんじや」

「直子がか。ほんまかね」

祖母は眉間にしわを寄せて、驚いたような声を上げた。

「先生が原爆に遭っていますかと聞いたら、その日は、市内の被爆所にいました。瓦が足に落ちてきて、怪我をしましたとはつきり言うた」

「直子が原爆にのう。初めて聞いた。隠して嫁にきたというんか」

祖母の少し険がある言葉に、父はなだめるように言う。

「被爆者ですとは、言えん時代だったから仕方なかるう。痛は原爆のせいかもしれないとも言われた」

祖母は目を伏せている。何かに耐えているように見えた。わたしは何度も父の言葉を胸の中で反芻した。たった今聞かされたことが、胸の中で激しく渦巻く。驚きと悲しみに満ちた心は、どうすれば治まるのか。十七歳の私には処するすが見つからなかった。父は出来上がったわら草履の鼻緒に、赤い布を巻き付けぎゅつと締めた。何かを決意したかのような、力強い手つきだった。

母は四月の半ばに退院した。赤や白のつつじが咲き始めた庭の敷石を、赤い鼻緒のわら草履を履いて、父に支えられて歩く。小柄な母がひと回り、小さくなったように見えた。居間に入ると、母は祖母の前に座り「長い間家を空けてすいませんでした」と、手をつけて頭を下げた。

「なんの、帰ってきてくれてよかったよう。ゆっくり休みなさい」

祖母は手ぬぐいで目頭を抑えた。

母は頬を強ばらせると祖母の前に進み「うちの体はお母さんに、看てもらいたいと思うとります。傷の手当てはお母さんだけに、お願いしたいです」と懇願した。

「お母さんだけに、お願いしたい」という言葉は、祖母の心を動かしたようだった。「離れて寝起きをすればいい。

私が付き添うから、心配せんでいい」と優しく言った。

母は下腹部に人工肛門を造っており、そこから排便が出る。その始末を祖母だけにやってもらいたいと言う。人工肛門を抱えた母の気持ちも、その頃の私は受け止めることができなかった。亡くなるまで、祖母一人がその部位を清拭していた。

ある夜、父は晩酌の焼酎を舐めるように飲みながら「直子に被爆者手帳の申請をしようと言うとるんじゃが、そんなものは自分には必要ないの一点ばりなんよ」と杯を置いた。祖母はすぐに、言葉を重ねた。

「直子の言うとおりじゃ。いまさら、何で被爆者手帳がいるね」

私はその言い回しに不快感を覚え、祖母を睨みすえた。命が長くない母には、被爆者手帳はいらないと言おうとしているように聞こえた。

「おふくろは、直子が被爆者だということを隠していたのが、気にいらんのか」

「そうじゃあない。わたしの気持ちをどう言うて、説明していいのか、自分でもようわからん。本人がいらんとするのにな」

祖母は苛立つように、顔を歪めると、立ち上がって台所に行く。

母の声は弱々しかったが、何かに挑むような強い眼差しだった。母は私の方に向いた。

「あなたにはなんにも、母親らしいことをしてやれんかったねえ」

節くれた指で私の手を握った。ひんやりとした、硬い小枝のような指だった。私は母の手を強く握り返した。その時、悩んでいた進路への、ひとつの答えが、確信となって胸に落ちた。

「お母さん、私は看護婦になるよ。看護学校には働きのながら行けるといからね。そうする。心配はいらんよ」

「そうか、看護婦になるんね。いい仕事を選んだね」久しぶりに見る母の笑顔だった。ひと呼吸すると「母親が被爆者だったという事は、言わんようにね。言っていることは何もない」窪んだ目に涙が盛り上がった。被爆者になったことは、母の責任であらうはずもないのに、どこまでも、恥じているような母だった。父は母の友達が暮らす呉市に数回通って、二人から署名をもらった。どちらも、被爆していることは、家族に知られたくないという理由で、最初は父と会うことを拒んだそうだ。が、母は病気で幾ばくもない命だと話すと、少しでもお役に立てればと、承諾してくれたという。

五月の風に誘われるように、母は息を引き取った。四二歳。弱さを見せない母だった。父は棺に赤い鼻緒の草履を

「直子の生きてきた証が、被爆者手帳をもらうことじゃないんか。わかってやってくれ」

台所で洗い物をする祖母の背に声をかける。

私は重苦しい空気の中に身を置きながら、頭の中は、自分の進路のことについてばいだった。父から、大学進学は諦めてほしいと言われていた。母親の手術などに多額の費用がかかり、学費は出せないと言う。夢を断られた私は、二人のやりとりをぼんやりと聞き流す。

母は日一日と衰弱していった。食べ物は喉を通らなくなってきて、医師の往診を受けていた。か細い腕に点滴をしている。

母が話したいことがあると言っているのです、すぐに離れて来るようにと祖母が呼びに来たのは、学校から帰ってテレビに見入っていた時だった。

部屋に入ると、父は正座をして母の枕辺にかしこまっっている。手にはメモ帳を広げていた。

「この二人が被爆所で一緒にいた友達なんじゃね。わかった。被爆の証人になってくれるように頼みに行く」父の声は上ずっている。

母は被爆者手帳の申請を承諾したのだ。証人になってくれそうな友達を、父に伝えていた。

「原爆に遭ったのは、ほんまのことですから」

入れて「しっかり歩いていけよ」と涙をぬぐった。祖母は母の頬を撫でながら「いい所に行くんだよ」といつまでも側を離れない。私は心の中で(看護婦になれるように見守ってください)と、繰り返し、繰り返し願いを込めて祈った。

母が亡くなって一カ月後に、被爆者手帳が届いた。

父は赤い表紙をいとおしむような眼で見つめていた。まるで母と会話をしているかのように「今頃、手帳をもらうてもどうにもならん。直子に見せてやれんのが悔しいのう」と、吐息をつくようにつぶやいた。

受賞の言葉

夏木美子

この度は栄えある賞をいただき、有難うございました。身が引き締まる思いです。福島原発事故のニュースを聞いたとたん、母の思い出が、湧き上がりました。被爆者であることは一生隠し通そうと決意して結婚した母は、自らが癌に冒された時初めて家族に、被爆していることを告げました。なぜ、母が隠していたのか、その答えを知り得たのが今回の福島での風評被害です。その当時の、被爆者に向けられた目はどれほど厳しかったか、想像を絶します。なんと遅い気づきでしょう。

被爆していたことを負い目を感じて生きてきた母に、もっと寄り添ってあげればよかったと、今になって思うので

す。幸せ薄い母でしたが、死期を迎えて「被爆者手帳の申請」を決意しました。母の人間としての尊厳を見せつけられたような、一瞬でした。看護師（当時は看護婦）になると母に誓い、働きながら学ぶことが辛くて「私を守ってください」と母に祈った日は遠い昔になりました。看護師を続けている私は、働いていないと、社会と繋がっていないと、そうしないと書けないというこだわりがあります。母を支えてくれた父は九十歳になりました。今も力強く生きている姿には学ぶものが多くあります。受賞という嬉しい知らせをいただき、今夜は故郷、広島の平和大通りに咲く夾竹桃の花の中を、スキップしている夢を見るかもしれません。心からお礼申し上げます。



夏木美子

なつき よしこ

1950 広島県生まれ
77 広島市医師会看護専門学校入学
81 正看護師資格取得
2002 まで広島市の病院で働く
現在三島市の病院で勤務

第7回
文芸思潮
エッセイ賞

優秀賞

治癒力

小学生の頃、左頬に大きなすり傷を負った私は、家族のすすめにより傷口にアロエを貼っていた。鉢植えから伸びる不恰好で荒々しいアロエの先端を指でちぎって、その多肉をしげしげと眺めていた私は、それから数週間後、自然の治癒力というものを自分の顔面において目の当たりにすることとなった。

同居していた祖母はアロエに敬意を払っていた。包丁で指を切れば傷口にアロエを巻いていた。私はそれを奇妙に感じながらも、同時に当然のことのようにも感じていた。なぜなら我が家の常備薬は、オロナインとタイガーバーム、そしてアロエが三大勢力を誇っていたからだ。

我が家では傷口を空気にあてて自然と治るのを待つ方法

山口里佳

がよく用いられたので、絆創膏やガーゼの類いは傷口には過保護過ぎるというスパルタ的な思想が定着していた。今の時代には全く合わない考え方で、一度彫刻刀で指を深く切ったときに、保健の先生が私の親指に何重にも巻いた包帯を見て、ものすごい大怪我をしたような気分になって少しうっとりとした記憶さえある。祖母の時代ではガーゼや包帯は高級品だったのだから仕方のないことなんだと思う。傷が頬だったこともあって、傷口にアロエを貼って上からガーゼで固定させた。アロエのぬめぬめとした感触がカタツムリのお腹を思わせるようで、なんともいえない気分です。その夜は眠りについていた。

登校日に私は笑い者となった。平成の時代に、ましてや

小学生がアロエの力というものを知るわけがなく、そんな得体の知れないものを頬に貼って登校すれば、からかわれないほうが不思議なくらいだ。以前にもトイレで転んで頭を切って、手術後、玉ねぎみたいなネットをかぶって登校した悪夢があった。ちびまるこちゃんに出てくる永沢君の気持ち痛いほど身に染みた日々も、私の苦しみをよそに皆笑い転げていた。小学生というものは本当に残酷なのだ。それで私は、夜眠る時にだけアロエを貼るようにした。子供が友達の前で親を恥ずかしく感じるのと同じようなもので、家に帰れば人目を気にせずアロエと共に過ごした。

目に見える速さで傷口はかさぶたと化し、かさぶたが取れた後も傷跡は残らなかつた。私はその自然の驚異的な力に驚かされた。私が人前でアロエを恥じていた間にも、アロエはちぎられた身体の一部で私を懸命に癒してくれていたのだ。

それから大人になって、私は転ぶこともなくなり、外傷のない生活を送ることでアロエの存在を忘れていた。でも大人になってみると、自分の周りの人を含めて、内側からの傷に多くの人が苦しんでいることがわかった。それは自分自身で自分を傷つけてしまうという悲しいことなのだけれど、生きている過程で保護の力と再生の力のバランスが崩れてしまったからではないかと思つた。

自分自身に過保護になり過ぎてしまうと傷を負うことを恐れ、結果的に再生の力は効力を発揮することなくどんどんと失われていってしまう。そういうエネルギーは使わないと錆びてしまうのではないだろうか。私が子供の頃、盲目的に内側が傷ついた日々があつて、それを治癒する力がどこにあつたのか考えてみると、家族や友達ではなく、常に自分自身か、飼っていた動物たちだった気がする。それはごまかしやまやかしかもしれないけれど、偽物だって信じていればいつかは本物へと姿を変えるかもしれないとは思っている。信じるという行為は、ある種の治癒力だからだ。

植物には驚異的な治癒力がきちんと備わっている。動物にももちろん備わっているけれど、私たち人間の治癒力は文明と共にどんどん退化していつている。それはどんな小さな痛みをも恐れる時代だからかもしれない。

世界は今もまだ戦争をしている。悲惨な映像を色んな手段で目にしてしまう。情報は選んでも、傷つかない方法は選べない。

本当ならきつと、いつでもどんな時代でも、人間であることの特有の痛みがひっそりと存在しているはずなのだ。人はすれ違って愛し合つて、次の日には別の誰かと出会つて、その次の日にはもう別れているかもしれない、そういう永久のない土地で生きていて、その瞬間瞬間に孤独や空

虚や不条理や、そういうメランコリックなものをいちいち感じてしまうのが人間なのだから。でもそういう尊ぶべき感情から自分を保護してしまつたり、そんなことに時間を費やしてられない生活の日々の速さに人間は慣れてしまひ、再生することの力に重きをおかなくなり、保護の力ばかりがどんどんと成長して、それは例えば物質で満たされたり、賑やかな音や街や人が空間を埋めてくれたり、外側からの刺激によって催眠状態になつていただけではないかと思う。常識とされるものだって集団の中で生まれたある種の保護の力だと思ふ。婚姻制度も法律も立派な保護の力だ。その力も一歩間違えれば十分な攻撃の力へと変わるの

が私たちが生きている土地というものであつて、だからこそきちんとした治癒力を養つていかなければ、守つてきたものが自分を苦しめ、内側からの傷によって命を絶やしてしまうことだつてあり得るのだ。私は東京という覚醒と催眠の材料を兼ね揃えた街で育つたことで、とても助けられたこともあつたし、疑問にぶち当たつたこともあつた。悲しいことの中に希望があつて、希望の中にも悲しいことがあるように、どんな肯定的な存在の中にも相反する存在がちゃんとあつて、だからこそ保護する力と再生する力のバランスが重要なんだと思ふ。

植物はそういうことをきちんと人間に示している。その力のバランスは自然界だけのものではなくて、元々は人間

にもあつたもので、でも自然との触れ合いが減ることによつて、人間は人間を過信しすぎてしまい、一方で人間であることの本質的な重みが失われているのではないだろうか。それは他者があつて初めて自分を知れることと同じだと思ふ。

私も以前は自然から生き方を学ぶべきだと言われても「自然は自然、人は人」と思つていた。自然には感情がないけれど人間にはあるからだ。でも生きているエネルギーが感情だとすれば、確実にそれは自然にも存在しているし、存在しているからこそ人間をも癒せる力があるのだと思ふ。

人間は利便性の発達によつて十分すぎるくらい保護されてきた。祖母に言わせると絆創膏を使いすぎだということだ。それによつて治癒力が鈍る一方で、催眠状態の傷口がゆつくりと確実に化膿している人たちが、生活に追われて生きることで自分でその傷をひつかいてひどくしてしまふ。

例えば何か大きな枠組みから放り出されても、自分がちゃんと正しい位置にいるのだと思える方位磁石のようなもの。それは自己に対する保護と攻撃のバランスがきちんととれた自尊心と、それを育むための肥料として星の数ほど存在する小さな痛みを感じることに、それこそが人間の治癒力を高めていくのだと思ふ。

私は自分を畑だと思う。そこに広がる土の力が魂の力なんだと思う。その畑であらゆる肯定的なものを育み、否定的なものを枯らし、どんどんと土を豊かなものに変えていくのが人生ではないかと思う。植物が満足な土でしか育たないのと同じで、人間も土を、本質的な魂の力を豊かにしていかなければ、そこで育つ物は顔も名前も持たない、実体のない自分でしかなく、それがどんどんと自分を形成していつてしまう。自分の畑で何が育っているのかもわからず、痛みを恐れて農薬ばかりをまき散らしていれば、いつか魂までも枯らしてしまう。痛みや悲しみは土が豊かであればいつかは枯れる。ものすごい膨大な時間を要するかもしれないし、なかなか根までは枯れないかもしれない。それでもいつかは耕され、そこから次の新しい生命が伸びてくる。

アロエが人をも治癒する力があるのには、豊かさという肯定的なエネルギーが圧倒的に強いからだと思う。そのエネルギーは空気をも変えてしまうほどで、豊かさは豊かさをきちんと拡散させるのだ。そうしてその豊かさに従ってついてくるものの中には、人間の治癒力の神秘が存在しているのだと思う。



山口里佳

やまぐち りか

1982 東京生まれ
2007 当時のバイト先だった映画館の友人たちとのグループ展開催をきっかけに、絵を描き始める。以後、都内にて個展を続ける。

中学生の頃に読んだ、ユダヤ人問題がテーマの「あの頃はフリードリヒがいた」という児童文学に衝撃を受け、自らも現代における様々な社会問題を盛り込みながら、感じて考える児童文学を書いている。

趣味は旅行と映画鑑賞



受賞の言葉

山口里佳

十一歳の頃、大好きだった祖父が亡くなり、私はその悲しさを紛らわせるために、お通夜で大はしゃぎをして叱られたことを憶えています。呼吸が苦しくなるような悲しみと向き合わなければならぬ時、私はお風呂場や布団の中で、生き続けることはなんてこんなに痛いんだろとよく泣きました。でもその痛みから生まれた先に、奇跡とされるものが感じられたり、目には見えない力の存在が確かにあることを知ることができたのです。私はそういうものに寄り添いながら、人間が承らえてきたことに、人の死の意味を見出しました。

このエッセイを書くにあたって、私は絶望と希望の痛みを、ほとんど初めてに近い感覚で知ったのですが、それを

言葉にすることはとても不思議な作業でした。そしてこの作業を助けるだけではなく、私の痛みを和らげてくれたのが大きな木でした。大きな木に触れて匂いを嗅いで、私の人生はあるべき状態に少しずつ軌道修正されていきました。結果、このような素晴らしい賞をいただけましたが、私のこれまでの人生観を肯定されたような、そんな幸福感で一杯です。本当にありがとうございます。これからも宇宙や自然の営みから、どんな痛みにもきちんと向き合い、自分の生命に取り込んでいこうと思います。最後に、私が学ぶべき二人のルームメイトと、このエッセイを書くきっかけをくださった土成さんに、この場を借りて心から感謝の意を捧げます。

我が国には再びない中国北京での
少年の目から見た植民地生活の反省と回顧録

蘆溝橋

定価 1300 円 (送料込)

東山昇 著 遠足の頃 千葉日報社刊

注文先 アジア文化社 ※御希望の方はアジア文化社に御連絡下さい。

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13 TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

シロイルカ

秋元麻由子

シロイルカを見たのは、それが初めてだった。前々から水族館に行きたがっていた娘を連れて、郊外の大型水族館を訪れたときのことだ。広い敷地の片隅の屋外プールで、そのシロイルカはゆうゆうと泳ぎ回っていた。手前にはカマイルカやバンドウイルカといった、なじみのある黒っぽい流線型のイルカがいた。時々やる気がわいてくるのか、フルスピードで右へ左へと泳ぐ。観客たちは思わず「ワー！」と歓声をあげた。水族館に来たという実感が急に湧いてきて、イルカさん、すごいね、はいね！と興奮気味に娘に話しかける。が、娘は前を向いたままウン、と一言、緊張の面持ちである。人間とのふれあいというコンセプトなので、動物たちはすぐそこにいる。観客はアクリル板の縁で待っていれば、動物たちがちょうど観客の目の高さに頭を出すようになっていいるのだが、我が家の幼い娘には少々

刺激が強すぎたらしい。

じゃ、次へ行こうか、と隣のプールへ移ると、私の足はビタリと止まり、言葉を失ってしまった。同じイルカでも、頭は丸く、ジュゴンに似た真っ白なシロイルカは、深い水の底すれすれまで降りると一気に水面に浮かび上がり、スーッと人間のそばまで来て、また同じ動作をくり返す。観客は、さ、どうぞ、ココですよとばかりに差し出された白くてやわらかい頭をさわることできるのだが、私はそれができなかった。

シロイルカが水泡に包まれて、キラキラと光を受けて上がってくる姿を見て、私は背筋がゾツとした。畏怖の念というものは、こういうものではないかと思った。千年前に生まれていたら、私はシロイルカを崇拜し、その姿を木に彫ってみたり、海に生け贄を捧げたりしただろう。シロイル

カはバンドウイルカなどちがいがい、一定の速度で上下に円を描くように泳ぐ。途切れ目のない、悠然としたその動きから、永遠という言葉が浮かんだ。この世界の主の頭を撫でるのは畏れ多い気がした。

そうして、シロイルカの水槽にへばりついたまましばらくすると、観客は私一人になってしまった。娘は夫とベングンを見に行ったようだ。そのときである。シロイルカが目を開けてこちらに近づいてきた。これまで不思議な目をしているな、と思っていたコーヒード豆のような楕円に横一文字は、閉じた状態だったのだ。観客の期待を心得たように人間に近寄るシロイルカは、心まで許していたわけではなかったのだろう。

目を開けてくれたシロイルカに私の好意を伝えようと、懸命に目で応える。水面に上がる度に心を通わせようとしていると、夫と娘に「ママ、と呼ばれる。じゃ、またね」と目を一層力を込め、二人の元へ行く。H(娘)はやっばりすこしこわいみたい、もう行こうかと夫が小声で言う。もちろん、もちろん、と答えて、ふれあいスペースを後にしながら夫に、ねえ、シロイルカの目はずっと閉じていたみたいだよ、観客が一人になったら目を開けたよ、と話すと、ああそうかと言う。動物はすごいんだな、目で見なくても心配で察してるんだ。そうだよな、だからあんなに思いっきり泳いでも壁にぶつからないんだよな。人間は弱

っちゃったんだな、と納得した様子である。その日はずっとシロイルカの衝撃が体に残ったままだった。シロイルカを見ると、自分が当然のように陸を基準に物事を考えてきたことに気がついた。ここは(私が)住めるところで、あつちは(私が)住めないところ、あんまり(私に)関係ないところ、陸地の残り、ぐらいに思っていたのではないか。単純に地球上の表面積を比較しても三対七だというのに。そう気づくと、陸と海の関係が逆転したらどうだろう、と思いだした。私が海の陸族館にとらわれて、ポツンと一人置かれたら……。最初は帰してくれと泣きわめいて、それから絶望に肩を落として、生気を失い、見るも哀れな姿になるのではないか。とてもじゃないが、観客を喜ばせる自信はない。

ひるがえってシロイルカは、堂々として、美しかった。頭は膨らんでいるし、体は丸っこいし、ちょっとゆかいな顔でもある。しかし、全体から発する穏やかで力強い生氣にはただ圧倒された。何の迷いも詰まりもない、流れそのもののようなシロイルカを見ると、美しいというのはこういうことかと思つた。

シロイルカを見ていたら、着る服に悩んだり、お金の心配をしている今の自分もくっきり浮かび上がってきた。シロイルカは、私の悩みを聞いて、なんと言うだろうか。

私 あのね、今うちお金がなくて困ってるの。
シ おかね？ あの、四角いほう、それとも丸いの？
私 どちらかと言え、四角い方かな……。

シ 今手に持つてるのはちがうの？
私 これ？ ああ、これはチケツト。ここに入るために買ったの。……そう、全然お金がないわけじゃないんだけどね。
シ フーン……。あなた、四角いおかねをいっぱいあつめてるのね。

わたし、よくわからないわ、そう笑って、シロイルカは水の中に消えていってしまいうるな気がする。ああ、待って、と追いかけてようとすると、そこは深い海の底で、私はハツとする。いつか観た映画『グラン・ブルー』のエンディングで、素潜り名人が陸に上がるための命綱を離し、イルカの誘う海の底へ行ってしまうシーンを思い出す。幻想的で、背筋が凍るような場面だった。

シロイルカシヨックはその後しばらく続き、デパートや地下道を歩いていると、ふとこが水でいっぱいだったらと考えたりした。人間の世界から一瞬距離がとれて、体が軽くなるような心地よさと、一抹の恐ろしさがあつた。

それから時は流れて、そんなことも考えなくなった頃、水がいっぱいの陸地を現実のものにしたのが、三月一日の大地震に伴う津波だった。津波の映像をテレビで見なが

ら夫が、実は人間の日常って脆いものなんだな、とため息をついた。私はふと思いついて、シロイルカを見ていたら陸と海が逆転するような感覚を覚えた、と話すと、へー、そんなこと考えてたの、と少し驚いてから言った。「シロイルカは、自然そのものだったんだね」。

シロイルカを最初に見たときほどのシヨックはもうない。シロイルカとは住む世界がちがうということもよくわかった。しかし、シロイルカは確実に私の中にその居場所を持つた。シロイルカを思うと、私の頭のはるか上をシロイルカが笑いながらとおっていくような気がする。



秋元麻由子

あきもと まゆこ
1974年生まれ。東京近郊で育つ
東京大学文学部卒
同大学院博士課程単位取得満期退学
現在横浜市在住

受賞の言葉

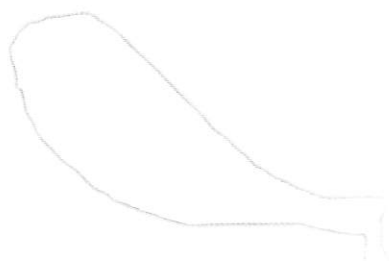
秋元麻由子

題材となったシロイルカには、娘の四歳の誕生日祝いに訪れた水族館で出会いました。他にも魅力的な動物がたくさんいる中で、理屈ぬきに目を奪われました。このシロイルカに特別な感情を抱いたのは私だけではないらしく、水族館を代表するマスコットキャラクターとして広く愛されているそうです。その場では存在感到圧倒されていた娘も、その後実に一年間にわたり（次に水族館を訪れるまで）、シロイルカのことを話していました。

今回エッセイ賞への応募を決めるにあたり、なぜか、書くとしたらシロイルカについてだと思えました。もつとも、応募を決めてからもなかなか文章がまとまらず、苦しい

思いをしました。これまで愛読してきた武田百合子、中上健次等のエッセイを読み返してはもう無理だとため息をついたものです。そうして諦めかけた頃、ふいに私なりの書き方が見つかり、子どもの頃から親しんできた民話の世界が作品の中に入り込んで来て、応募にこぎつけることができました。そんなわけで、まだまだ言葉もたらず、未熟な私の作品を選んで下さったことに心から感謝しております。どうもありがとうございます。

この賞はシロイルカが運んでくれた気もしています。シロイルカは先ほども「うれしい？ よかったネ」と言っ、私の頭上を旋回していきました。



ひぐらしの晚餐

西田昭良

カナカナカナ、カナカナカナ……。

夕闇が濃くなる頃。ひぐらしの第一声が静寂を破ると、それに釣られるようにして次々と仲間たちも鳴き出し、森に囲まれた寺の境内は、清涼感に溢れた蝉しぐれに包まれる。

だが、寺の本堂に身を寄せている児童たちには、この風趣あるひと時を楽しむ余裕などは全くない。夕飯を食べたばかりだというのに、もう腹が減って腹が減ってたまらないのである。

昭和二〇年、太平洋戦争も末期のこと。東京はアメリカの空襲で、都心は焼夷弾、郊外は爆弾、と壊滅的な被害を蒙った。

その難を逃れ、群馬県赤城山麓にある小さな寺に学年ごとって集団疎開をした小学五年生たち、およそ三十名。ま

な先生の懲罰が待っている。児童たちは厳しく詰問されるが、自分が犯人だと名乗り出る者など誰もいない。遂にはそれらしき者か、或いは全員の連帯責任となつて懲罰が始まるのである。

本堂の前の枇杷の太木につかまり、尻を突き出す。当時の海軍に倣つて、丸太で作られた太い精神棒が飛んでくる。げっそりと肉の落ちた尻に、唸りを上げる精神棒が深々と食い込む。

それはまだ我慢できる。できないのは、そのあとの罰則だ。一時間にわたる本堂板の間での正座である。

すね肉など全くついていない足が辛抱できる限界は、せいぜい一〇分ぐらいだろう。我慢を越えて膝を崩すと、また精神棒が唸る。気を失いかけて倒れ込むと、頭からバケツの水が浴びせられる。

こうした痛手を受けて、今や誰も村の農作物には手を出せなくなった。最後の頼りは自然界の恵みだけである。

山栗が熟すまでには、まだ数カ月はかかる。かと言って、今が盛りのキノコや梅は中ると大変なことになるのは、子供でも皆知っていた。残るは、神社の外壁などに巣をくう雀の雛や川で釣った魚。それに、太さを増してきた自然薯や草いきれの中で容易に見つかるバッタなど。それらを風呂場で焼く。これは旨い。しかし自然はそう毎度のように贅沢なご馳走を振る舞ってはくれなかった。

だ数カ月しか経っていないのに、今度は極度の食糧難に襲われ、手足はゴボウのように細くなってしまった。

三度の食事は一汁一菜と粗末なもの。更に、大豆の搾り滓やサツマイモの蔓などが混じったご飯は、茶碗の底にへばりつくほどわずかである。喉元を過ぎると瞬く間に消化され、育ち盛りの胃袋はいつも空っぽなのである。

こんな時、親元になれば、母親が口に放り込んでくれるタクワンの切れ端などで、一時凌ぎにはなつただろう。だが、今、東京は遙か地平線の彼方だ。

飢えに耐えかねた児童たちは、遂に周辺の農作物を野鼠のように漁るようになった。

しかしそれは寺には筒抜けである。

「畑なんぞ荒らすんは、東京の疎開っ子しかいねえ」

と、村人が寺に訴え出るからだ。その夜は、地獄のよう

何本も東京から持ってきたコウリヤンで作った部屋箒。その穂先に残るわずかな赤い実も、扱いては食べ、食べては扱いて、すべて坊主になってしまった。

他に何か食える物はないか、と思案に暮れていた矢先、

「ひぐらしは甘いぞ」

と誰かが言った。尾袋をやぶり、頭の部分の突起に付着している粘々した昆虫の体液のことだ。

夕暮れを待つてひぐらしを捕え、試しに舐めてみる。長いこと甘い物を口にしていなかった児童たちには、甘味の上もない。

この大発見は瞬く間に寺中に広まった。

その日から、ひぐらしの一声とともに児童たちは、鬱蒼と茂る森の中へ三三五五と散つて行く。

ひぐらしは他の蝉にくらべて捕まえ易い。樹木の低い所に止まるからだ。息を殺し、匍匐前進をしながら木の根元へと忍び寄る。幹に沿って視線を夕空に走らせると、黒い小さな出っぺりが目に入る。それがひぐらしだ。

静かに手を伸ばす。時にはモチ竿を持って。何度も逃げられるが、誰も焦らない。広い森の中には何百何千というひぐらしを、自然の神様が用意しておいてくれたからだ。

こうして蝉しぐれが上がる頃には、誰のポケットもふくれ上がるほどの大獵となる。ジージーと鳴き喘ぐひぐらしを宥めながら、四方から児童たちは集まり、やがて車座と

なる。

尾袋を破り、ペチャペチャと甘い汁を吸っては、地面に捨て、捨ててはまたしゃぶる。見る見る地面にはひぐらしの屍が山となる。

ジージーとなおも手足をまがき続けるひぐらしの最期。それを横目に、甲高い談笑に包まれた。ひぐらしの晩餐。空襲の代わりに、空腹という敵に翻弄され、戦争や家族のことなどは遠退いてしまった児童たちの、唯一楽しい宴が今夜も続く。一週間ほどの、ほんの短い間だが。今年もひぐらしが昔の思い出を連れてやって来る。どんな理由であれ、「戦争」という文字を人間社会の辞書から完全に無くしてくれるように、と強く訴えながら。



西田昭良

にしだ あきよし

1934 東京生まれ
1957 東京放送入社
1991 同退社
1992 ジップ企画設立
1995 同企画解散 現在に至る

受賞の言葉

西田昭良

才覚豊富な文人やエッセイストならいざ知らず、私のような凡人が書き物を遺すなんて、いろいろな意味で、恥の上塗り、愚行であることは承知しています。

ならば、今更、なぜ書くか。孫やそれ以降の子孫たちに、こんなケツタイな先祖がいたもんだ、と茶飲み話になるような足跡を遺したい、というのが本音です。

戦争体験。私の書くテーマの一つです。遺す前に、その一編が栄誉ある賞に推挙された。驚きと、気恥ずかしさと喜びが混じり合った複雑な気持です。

多くの方々が多方面で苦しい体験をされた戦争。戦地や空襲で亡くなられた方々への追悼（おもい）は筆舌に尽くし難いが、その頃、親元を離れた疎開地で、ひぐらしの味で一時的にも飢えと寂しさを凌いだ子供たちがいたことも、是非後世に伝えたかった。

その時の辛抱と希望維持が、長じて、戦後復興の一翼を担う力になったことは否定できない。

この度、東日本大震災が起きた。罹災者の子供たちは私の戦争体験以上の苦しみをいま味わっているだろう。受賞の栄誉と喜びを彼らへの切々たるエールに代えて送りたい。頑張れ、東北の子供たちよ！

植物園の穴蟬

金田一淳

Essay

第7回
文芸思潮
エッセイ賞
優秀賞

私たち一家が下北半島の小さな町から札幌に引っ越しをしたのは、私が九歳になったばかりの、昭和二十九年四月初めのことだった。

大都會の景観に目を見張り、人の多さに圧倒されながらの新生活は始まった。初めのうちこそ新鮮な生活はある種の緊張感をもたらしてくれたが、父と母は仕事に、私たち兄弟三人は転校先の学校生活にと、それぞれの新しい環境への順応努力は並大抵のものではなかった。そして三週間もすると、その張りつめた糸があちこちで切れ始めた。末っ子の私などは幼友達を恋しがって母の膝で泣きじゃくることもあった。

五月の連休に入ったとき、父が家族の疲れを癒そうと考えたのだろう、家族を市内見物に連れ出した。円山動物園

を見て回り、三越デパートの食堂でカレーライスを食べた後、歩いて植物園に向かった。植物園は広かった。何しろ市街地の9ブロック分の敷地なのだから、小学三年になつたばかりの私にとってその広さは想像の域をはるかに超えていた。その日、眩しい新緑の中で故郷の山と同じ匂いに包まれて過ごした私たちは、ほどよく歩き疲れたせいもあってか、気持ち晴れ晴れとして元気を取り戻していた。そして私は、もう一度植物園に行ける日が来ることを願うようにもなっていた。

転校先の小学校では、級友たちがさまざまに私を誘ってくれた。しかし、電車で円山公園に行くとか植物園に行くとなると、断るしかなかった。我が家の経済状態ではお金のかかる遊びは許されなかったのである。せめて五

円玉一枚さえあれば、あの植物園で友人と一緒に遊べるのにと、休日の度のため息が出たものだった。

夏休み直前のある日曜日、一人で遊びに出た。いつも遊んでくれる友人はほとんどが連れ立って円山動物園に行ったので、一人で遊ぶしかなかった。大通り公園から道庁に回り、池の岸で小さな魚を掬って遊び、そのあと目的も定まらないまま歩いていくと、いつの間にか植物園の北側に出た。そのまま垣根に沿って日陰を進み、西側の通りに曲がった時だった。十数メートル先の垣根の辺りで、二人の中学生らしい姿がスワットと続けざまに消えた。とっさにはどういふことか合点がいかないままその場所まで行くと、柵の一部に人が潜り抜けられるくらいの隙間ができていた。私はゆつくりとさりげなく辺りを見回した。うだるような暑さの白昼の通りに人の気配は全くなかった。ほんのちよつと迷いはしたが、次の瞬間私はさつとその隙間に身を躍らせていた。まばゆい陽光の世界から深閑とした翳の世界に入り込んだ途端、汗ばんでいた体中の皮膚が縮んでいくように感じた。木の間越しに見やると、中学生の姿は遠ざかっていくが、話し声や笑い声はまだ聞こえていた。見つかつたら酷い目に遭うかもしれない。そう思って、私は動けないまましばらく茂みの中に身をひそめていた。中学生の気配が全くなかったのを見計らって、私も彼らの方へ静かに移動した。茂みをかき分けていくとすぐ

に細い遊歩道に出た。少しほっとしたが、どの辺にいるのかは見当がつかなかった。迷い出たその道を行くと、ほどなく異臭がしてきてクマの檻の前に出た。その近くには小さな蒸気機関車があつて、初めて入った三ヶ月ほど前の記憶と重ね合わせる事ができた。

その日私は、思いがけぬ幸運を喜び、お金がなくても友人と遊べるという期待感でいっぱいになりながら、植物園を隈なく歩き回って楽しんだ。

夏休みに入ると、さつそく植物園で遊ぶ計画が知らされた。私は、手伝いがあるから少し遅れていくと嘘をつき、時間を見計らつて例の柵穴から園内に忍び込んだ。大きく回り込んで友人たちを探し、走ってきたふりをして追いついた。

その日友人たちに教わつたのは穴蟬の見つけ方や羽化のさせ方だった。まだ朝露の残る林の中で木の幹や地表を探し、土の中から出てきて木に登り始めた穴蟬を見つけたら、蟬の穴を見つけては掘り出したりした。そして、その穴蟬を木の幹や自分のシャツに止まらせたりするのだった。やがて、陽を浴びた穴蟬の背中が割れ、羽化が始まる。中から懸命に出てくるのは、瑞々しい薄緑青に白濁をまぶしたような美しい姿だった。よく落ちないものだと思心するくらい体をのけぞらせながら這い出ると殻にしがみつ

て静止する。下北の山でよく見たアケビの実を思い出させるその背中には、天使のような小さな羽がついていて、それが少しずつ伸びて広がりが大きな羽に変化していく。その体が茶褐色になり、その羽が薄いガラスのように透き通り細かな筋目がくつきりするまで、私は根気よく見守つた。友人たちは次々に穴蟬を見つけているようだったが、私は穴蟬の数には執着していなかった。その数分の変化のどの瞬間も光り輝く宝石のように思えて、眼が離せないでいたのである。

羽化が終わると、蟬は短い一生の最期を謳歌するために元気に飛び立っていくのだが、それを何匹見送つたかを私たちは競い、その証拠になる抜け殻を勲章のように自分のシャツに付けた。もちろん数の上では最下位の私だったが、勝ち負けはどうでもよかった。神秘的な羽化の一部始終を見られるだけで私は大きな満足感に浸ることができたのである。

ただ、そのことを家で話すことはできなかった。入園料をどうしたのか聞かれると答えようがなかったからである。私は話したい欲求で喉が引き攣るような思いだった。

次の日も同じように柵穴から入り植物園で遊んだ。探し、捕まえ、見つめ、満ち足りて帰宅した私は、とうとう我慢ができず、夕食の支度で忙しく動き回る母を追いながら、蟬で遊んだことがどんなに素晴らしかったかを話した。そ

して、入園料は友人が出してくれたとこまかした。すると母は仕事の手を止めて、「すぐ返しなさい。お金の貸し借りは友達を失くしますよ」と五円玉を私の手に握らせた。

数日後、三度目の蟬遊びの誘いがきた。私は母からもらつた五円玉をポケットに握りしめ、友人たちと一緒に植物園に向かった。疚しさもドキドキする感覚もなく、正面入口で入園料を払う時には、私はだれかに誇りたいような気分になさなっていた。

目当ての場所に着くと、私たちは蟬の穴を探し始めたが、その日も穴蟬はたくさん見つかった。私はシャツの胸や袖に三匹止まらせて次を探していたが、次々に背中が割れ出したので、近くの大木の太い根に腰掛けて羽化を見守ることにした。何度見ても羽化の様子は神秘的だった。私は三匹を順繰りに見ながらうっとりしていたに違いない。

三匹とも殻から完全に出て、いよいよ羽が大きくなり始める時だった。いきなりブーンという羽音とともに私の顔の周りを大きめの蜂が飛び回った。慌てて手を振り回しながらアツと思つた時はもう遅かった。私は足元でポト、ポトツという微かな音がしたのを耳にした。上体を大きく揺らしたからだろうか、二匹の蟬が地面に落ちていた。二匹とも羽や背中を傷めたようで、引っくり返つて悶えていた。そつと起こして様子を見たが、羽は小さくしなびてい

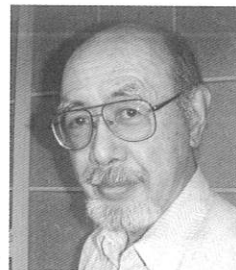
て、それ以上は変化しそうに見えなかった。異形の蟬になれば飛ぶこともできず、死んで蟻の餌になってしまう。友人から聞いていた残酷なことが、今自分の目の前で現実になろうとしていることに、私はたぶん青ざめ、うろたえていたと思う。友人たちの眼を盗むようにして、木の枝で大きな草の下に二匹を隠した。見るに忍びないという気持ちもあつたが、証拠隠滅に似た意識も強かつたに違いない。

腹のあたりで羽化した蟬だけは無事に飛び立たせた後、友人に蟬捕りは止めたと伝え、私はクマを見たり蒸気機関車に乗ったりして遊んだ。それから、もう一度さつきの場所に行ってみると、無数の蟻が行列をなしていた。私は身震いし、踵を返すと広場に走った。芝生に寝転び空を眺めながら、お金を払わずに入園したこと、母に嘘をついていること、友人たちに隠し事をしてることなど、あれこれと思いが交錯した。罰があつたのだらうかと気が滅入ってしまった、しばらく元気を取り戻すことができなかった。

その後も植物園には行ったが、積極的に穴蟬を捕る気にはなれなかった。友人の手前捕まえたとしても、木の幹に止まらせるようにした。羽化の素晴らしい光景を見るにはそれで十分だった。やがて、穴のあつた柵が補修されてしまつたり、蟬以外の遊びに興味が移つたりして、植物園に行く回数は自然に減つていった。

中学三年になる時に、父が病気で倒れたため、私たち一家は故郷に舞い戻つた。

あれから五十年の歳月が流れた今、私はつくづく思う。札幌での生活はわずか六年間だったが、それは私の少年時代のほとんど全てでもあつたと。その中でも、蟬の羽化に見入つた植物園でのあの思い出は、微かな苦味も逆流してはくるが、私の記憶の小屋屋の中でいつまでも色褪せることなく神秘の光を放っているのである。



受賞の言葉

金田一 淳

金田一 淳

きんだいち あつし

1946 青森県大湊町生まれ
弘前大学卒業後7年ほどのフリーター生活
74 中学校教師となる
2005 定年退職し、年金生活中

五十嵐編集長からの電話に出て最終選考結果を聞いた時、私は喜ぶ前にびっくりしてしまい、とっさには感激の言葉も出てきませんでした。このような受賞は未経験のことだったので。そつけない受け応えに呆れたのではと受話器を置いた後は反省しきりでした。

定年退職後、日々を無為に過ごしている自分に気づき、初めて文章を書くことを思い立ちました。今は亡き母のことや自分の少年時代を思い出して書いていると、記憶の向こうのペールが剥がれ、忘れていた過去が次々に蘇ってくるのにある種の快感を覚ええました。それはやがて二十章ほどの記録としてまとまり、私だけの一冊の本になりました。学生時代から小説を書き続けている友人に笑われるの

を覚悟で読んでもらうと、「面白いと言って、「文芸思潮」を紹介してくれました。彼が二つの章を特に評価してくれたので、そのうちの一つを独立させて書き直したのがこの作品です。

処女作とも言えるこの文章が人の目に触れるのはこそばゆい感じです。読む人を意識して書いたものではないので、どんな批評を受けるのか気にもなります。言葉の紡ぐ世界は憧れです。しかし、呻吟するのみで一片も編めずに無力感を覚えることも度々です。「文芸思潮」に掲載される作品から学び、言葉の感覚を養っていきたくと考えていますので、さまざまな形でご指導・ご教示いただければと思っております。

アザラシ・ジョセフィン

ならはたかし

アザラシは一名シードッグと呼ばれる犬に似た人懐っこい顔をして、手足代わりの鱗ウロコで海中すばやく泳ぐけれど、陸地では芋虫のようにうごく愛嬌のある動物だ。だがまず動物園か、テレビの映像でしかお目にかかれない、ぼくには縁遠い存在と思っていたら、オランダ本国の北、バルチック海沿いのワーデン・シーの列島に棲息しているというので、その島のひとつシーエル・モナコグ島に行ってみた。ワーデン・シーというのは広い領域の遠浅で、引き汐のときは瀬がいちめんに砂地となり、満潮には海水に沈む、海岸線の定まらない海のことだ。アザラシは水と半ば暮らしているくせ水中で呼吸ができず、身をよせる陸地が要る。といって脚がなく、地上に身体をくねらせて歩くから岩や崖は苦手だ。ワーデン・シーのゆるやかなスロープの砂地

が格好の場所となる。

ところでそれらの島に行くフェリーは本国の陸地から目の前に見えるのに深みのところを遠まわりしなければならぬ。それに加えて砂地をバルチック海の浜風にいびられ、匍匐植物と、ひねた茨があるだけの元来過疎地になっていた。それが最近とみにツーリストが押しかけるようになったのは並のリクレーシオンの動機からではない。アザラシが棲むのどかな天然自然の環境に触れられるということからだ。オランダは小さい国で人口密度が高くどこもすべて耕作、人工化されている。人びとがこの狭い重箱の隅をつついているストレスから一時でも逃れ出ようという気になるのもうなずける。

島にとつたホテルのボーイに「アザラシが見たいのだけ

れど？」と聞くと、「遊覧車に乗ると見られるよ」と言う。それは二、三十人乗りの素朴なものでトラクターに曳かれて砂地をゴトゴト走る。それも決められた時間に出るのではない。引き汐時を見計らって出発し、満潮時までには戻りもどらねばならない。砂地が瀬に沈むからだ。それでぼくは暗いうちに起きてホテルの裏通りから出るその遊覧車にとびのつた。

中秋のオランダは湿っぽく天候が変わりやすいが、その日は暁あけの陽が広大な引潮跡の砂地を蒸かし、水平線まで折り重なってつづく無数の水溜りと、溝に映えわたり、まぶしいライト・グレー一色の世界をかもしだしていた。ぼくはこのときアザラシが甲羅干しする場にまさに居合わせている気分になり、彼らが今にも車窓に現れるのではないかとキョロキョロした。だがそれらしい姿は見当たらない。数知れぬ水鳥の群れが洲を突ついているだけだ。車内のガイド・アナウンスがシーエル・モナコグは《僧侶の半眼》を意味し、昔カトリックのお坊さんがここでレンガを焼きながらメジテイションしていたところから島の名が出ていると説明する。

やがて前を行くトラクターのタイヤが海水で洗われるようになり、遙か遠方に白波を望めるところに来て、やっと海らしい海にありついた感じだった。「ここが東西に連なる島の東端にあたる所で一時間の休憩に入ります」と、車

内アナウンスが告げ、ツーリストたちはいっせいにそこに降り散った。そして砂地に腰をおろし持ち寄りのコーヒを飲み、貝殻を拾い、無心にピチャ、ピチャ瀬に足を浸し、持ち出し禁止のアサリやハマグリを踵でほじってみたりして時間を過ごす。

そこへ「あそこにアザラシがいるんですよ」と、運転助手が声をかけ、トラクターから持ち出した三脚に望遠鏡をつけると皆がそれにあたかっていった。ぼくは彼の指した海水のむこうにヌーボーと霞む砂丘を見た。……そういうえいっているようでもある。それにしても現地に来て望遠鏡の映像のアザラシもないものだと思った。もともとアザラシにしてみれば住み慣れたテリトリーで甲羅干しの悦に入っているところをツーリストにじろじろ見られては敵わない。ワーデン・シーが国立自然公園に、アザラシが天然記念物に指定されるころから、皮肉にも群れは立ち入り禁止の島に巣換えるようになったのだ。

それでぼくは直じかに彼等にお目に掛かれぬものかと家への帰途、島の対岸にあるピュータービューレンのアザラシ病院に寄った。そこは列島の周辺で母親にはぐれた孤児のベビーアザラシを拾い上げて収容し、授乳介抱して、独り立ちができるようになってから誕生地の自然にもどす仕事をしている。近來陸地から流れでる廃液やビールの公害病

で死亡する親アザラシが多くなって孤児アザラシが増えたからだ。

そこには年に一〇〇匹に上るベビーが拾われてくるそうだが、ほくが訪ねたときも四、五〇センチから七、八〇センチあまりの子アザラシがプールに泳いでいて、看護役の女の人たちが食べ滓のニシンを網ですくいあげ新しいのと取り替えていた。「可愛いものでしょ。こうしていると人をまったく懼れませんか。つい頭を撫ぜたくなりませんが野性はまぬがれませんが、鋭い歯で噛みつかれることもあります。怖いのはその歯にバクテリアがいつぱい付いていることです」とその女の人は言う。むろん柵が張ってあつてそこも訪問客が直接近づけないようになっていた。

それが、後日ほくはフランス・ブルターニュの友人を訪ねたとき、その近くのランスで奇妙な成人した雌アザラシにめぐり会うことになった。ランスというのは海に流れこむ川の入り江ともいえそうな河口一帯のことで、満潮には流れが逆流し海と川の魚の両棲するところだ。

その友人の世間話のうちに「モードルックにアザラシがいるよ」と聞いて耳を疑った。それも一匹だという。アザラシは群生しているのが普通だ。「そんなバカな！」と一笑にふしたところが「本当だ。嘘だというなら見に行こう」と、ムキになった。モードルックといえは両岸が屏風のように

シは前後の鰭をピクピク動かし眼を細めている。

そのうち、狐犬のポインターが嗅ぎつけてやってきた。どうなるものかと見ていると、犬がとびかかる寸前アザラシはスルリと水にダイビングした。水に入ればアザラシの天下。当てをはずされ、うろうろするポインターが飼い主に呼ばれて立ち去ると、アザラシはまたノソノソと丸っこい身体をうごめかし棧橋の上にもどってきて、同じ姿勢で元の位置に寝ころんだ。身体を棧橋の縁から乗り出しているのはこんなときの用意だったのだ。

レストランの主人の話によると地方自治体政府ではこの雌アザラシがはずみにこのランスに迷いこんだものと、数回捉えてサン・ミッシェル付近のワーデン・シーの群におくりこんだが、数日経つとまた独りモードルックの同じ場所に舞いもどってきて、泳いでいる子供たちや彼らのゴムボートを鼻でつきあげてはじゃれついたりしているという。これはほくの想像だが、このアザラシはベビー時分孤児となってアザラシ病院に拾われ、保護をうけて自然にもどされた。ところで彼女自身は生まれて間もなく母親を失い、人間の手によって授乳哺育されたその恩愛と好意が忘れられない。ペータービュレーンの看護婦さんの話では母親を慕って終夜泣きつづけるベビーアザラシがいるという。このアザラシは逆に本当の母親を知らず、物心着いたときは看護婦さんの介抱の手のもとにあった。人間を母親

うにそそり立ち、浜風を防いでいる小さなヨットハーバーでおよそアザラシを連想させる場ではない。信じられない気持ちで駆けつけたら、いた……!

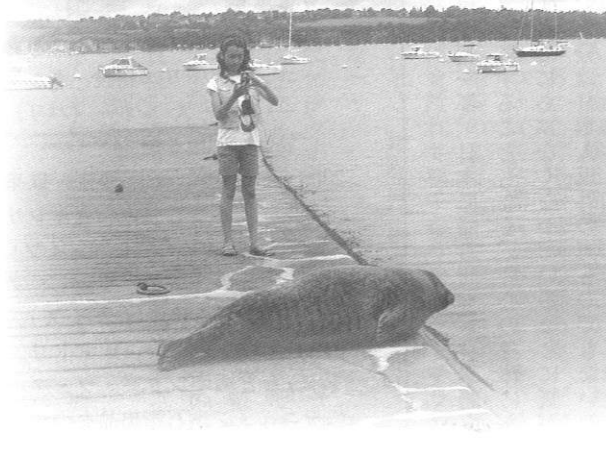
そこはヨットの帆が林立し、ボートを上げ下ろしするコンクリートの棧橋があるのだが、ランスに向かつてなだらかに下降し、干潮に三〇メートル余りの全長が水面に出、満潮にその半ばが沈む。向かいにはレストランがあつてそのペランダからランスが一望でき、中の島にケーキでできているような綺麗なお城が見える。そんな風景を前に海草を食べて育ったラム肉のステーキを食べさせるといふので友人はよく行っていた。

その時は汐が上がりかけてきていて、その棧橋の半ばほどにアザラシが一メートル五〇センチばかりの体長三分の一ほど頭部を水面にむけて乗りだし、ごろりと横になっていた。ランスの縁は引き汐になると猫の額の砂浜が現れる。バカンス時期だったから二、三〇人の人びとが甲羅干しして子供たちがキャツ、キャ、棧橋から水に飛びこんだり、ゴムボートに乗り込んだりして忙しく往来し、よもやアザラシを踏みつけはしないかとハラハラするほどだ。けれどアザラシはそんな騒ぎにわれ関せずと身動き一つせず、眼をつむって心地よさそうに甲羅干しをしている。ときどき子供らはアザラシに近づき、頭を撫ぜたり、背中をこりこり搔いてやつたり、髭をひっぱったりしている。アザラ

と思ってきたのではないだろうか。そしてその臭いを慕い追いつづけるうちに偶々モードルック・ランスの狭いビーチに迷いこみ、その懐かしい人間の臭いを嗅ぎ、満足して居付いてしまったのではなからうか……。

村の人達は彼女をジョセフィンと名付け自然のなかのペットとして親しんでいる。

最近得た友人からの情報によると、ジョセフィンが彼女より一回り大きめのボーイフレンドを伴ってきて、棧橋に番で甲羅干しをしているそうだ。





ならば たかし

本名 榊葉 雍
 1930年、東京に生まれる
 55年、武蔵野美術大学洋画科卒業。現代美術を手がける
 68年、第5回インターナショナル青年美術家展優秀賞、第4回ジャパンアート・フェスティバル大賞などを受賞
 75年、黒御影石に魅せられスウェーデンに移住
 96年、スウェーデン・ロイヤルアカデミー芸術文化賞、プルーデル美術館賞（パリ フランス）受賞
 85～99年、フランス・ブルターニュにアトリエ建設、ギャラリー・デニス・ルネー（パリ）に於いて個展5回
 2006年、オランダに移住。以来デン・ボッシに住み、ギャラリー・ハンス・マイヤー（ドイツ・ジュッセルドルフ）を通じ、アート・パーゼル（スイス）、FIAC（パリ）、ARCO（マドリッド）などのインター・フェアにモニュメント石彫出品をつづける

受賞の言葉

ならば たかし

僕は日本を離れて三十五年になる。それを言うときぞ外国ずれしているだろうと思われる。ところが僕は未だに日本人以上の日本人なのだ。ヨーロッパのど真ん中に住み、オランダ人を女房にしていながら、ブローケン英語をしゃべるだけで外国語は全くだめ。もともと、ぼくがヨーロッパに来たのは四十歳を超えてからだから、それから言葉を勉強してもはじまらない、日本語で通そうと決心したからだ。

それで彫刻家として石を選び、それに自分のメンタル、イデーをそのまま刻んで日本を語らせた。それがヨーロッパに通じてスウェーデン、ドイツ、フランスと、ヨーロッパを石のランゲージでしゃべりまくった。むしろそんな口先で言うようなものでない。事実石をぶら下げ、汗水

たらして歩くだけで精一杯、日本に帰る間も、日本語を口にすることも、文字にすることもなく、肝心の身体にあるほうの日本語がすんでいぶなくなっていることに気が付き、ゾツとした。自分は日本人以外の何ものでもないのだ……。

それがパソコンでエッセイを書く動機だった。パソコンは作文、構文に便利というだけではない、正しい日本語を個人的に教えてくれる。それもやってみると面白い、石にしゃべらせ、さすらった跡を摘みあげることができる。

書いてみてまたその日本語のレベルが気になってコンペに応募してみた。それが今、捨てたものでない。ことをまさに噛みしめることができている嬉しいことはない。

第7回
 文芸思潮
 エッセイ賞
 優秀賞

わたしのメルトダウン

山田まさ子

おひな様を過ぎると、なたねつゆが降る。罅割れた田畑を通りながら、今年もなたねつゆはなかつたのだなと、わたしは思った。

古里にはもう長いこと、寄りついていない。昔はうるさいほど蛙の啼く村であった。正面にはけむった藍色の山がそびえ、細々と続く小川も畑も、トタン屋根や木造の家々がぼつぼつあるのもそのままなのに、村の半ばが突然、分断されている。高速道路が横たわっているのだ。高速道路は高架橋になっていて、その下の道路は車も人影もみえないのに信号機がついている。どこか他所の街から切りとってきたような巨大スーパが、あかるい色の横文字の看板を掲げて建っている。

イタリア語か何かやろう、独りごちた。八年もひとり暮らしを続けているところなる。

「まるで、舞踏会の手帳、じゃけん」

戻ればひとり言まで土地の言葉になる。舞踏会の手帳は年増女が過去の恋人を訪ね歩く白黒映画だが、わたしとおおいなる隔たりがあった。年増は同じである。だがわたしは休日街をぶらつけば共産党員が寄ってくる。彼らは何か秘したる悪事の相談のように、さっとわたしの手にチラシを握らせ、そばを離れて様子を見がう。チラシはみなくてもわかっている。「死ぬ前に借金の相談を！」「多重債務に苦しむあなたへ」

貫い物のスカートにピンクのキティちゃんのTシャツを着込んで、猫背でとぼとぼと歩く小太りの女。これでフェリーニの「路」の女主人公のように純であればまだ救いがある。チェーホフの「かわいい女」でもいい。「肉体の門」のような凄みもなければ、さりとして「赫い髪の女」みたいな夕暮れにふる雨のしとやかさも無い。

取り柄の食欲にも年とともに陰りがみえてきた。要する

にボロ着の上からもはつきりみてとれる大きめの胸と達者な口以外、さして輝きのない女なのである。

相違点ふたつめ。フランス映画の華は女心を手帳の恋人たちとの逢瀬で埋めようとしていたが、こちらの動機は金品であった。

フクシマ3・11の二日後には、わたしは東京から逃げ出していた。四国の田舎町にある通称赤のアパートに転がり込み、というの運のよいことに住んでいた中国人たちが母国に逃げ帰ったために空いていたのだ。コゲのこびりついたフライパンも、バラ模様のカーテンもそのまま残して。わたしは中国娘の香水のにおいのする蒲団にすっぽりともぐり込んだ。電灯には兎の毛のついた桃色の飾りが吊り下げられ、元の住人の息遣いが、来て数日のわたしなんぞよりずっと色濃くたち込めていた。

生きているひとの部屋に暮らすのは奇妙であった。窓から首を出し、わたしは通りの向こうに彼女の置き去りにされた恋人が来るのではないかとうかがったりした。黒ずんだガス台だの流しにからんだ髪だの彼女の残した生きている活発な痕跡が、わたしをうっとりさせた。もうずっとこんな場所にはいなかった。

八年前、両親が相ついで亡くなってから、わたしはうつ病になった。母の死への自責からであった。精神病院にあらがちな大量処方で、ぬいぐるみよりも無能になった。

信じた母は、よくある田舎のバカ娘であった。

ただの一度も男に気を許さず、物品を介した交情しか、しかも口先ばかりでそれすら出来るだけ労少なくして、ハートよりも懐の温もりのみに関心を示すわたしは、この点で胸を張るべきかもしれない。進化している、先代よりも土佐の高知のはりまや橋で、母は父を昼から夜まで待った村への最終バスのテールランプを見送った後、歩いて帰ろうとした。裸電球が所々ぶら下がる湿った細長い長浜トンネルを抜け、母は叫んだり笑ったりした。お腹には後に里子に出されるわたしの兄がいた。

二十一、二歳と娘盛りを精神病院の鉄格子の中で過ごした。電気ショック療法は、むごいものだった。暴れてもいないものに電気をかけた、幾度も。生がけ（無麻酔）であり痛いうえに、記憶を失う。イ・ロ・ハも書けなくなっていた。数年で文字は取り戻したが、ほとんど失われた過去の記憶は戻ってこなかった。

おかあやんの想い出がなんちゃあない、母はそれをまるで自分のせいであるかのようにいつていた。どうしようもない男と別れられなかったという意味において、母はジェロンミーナに近い。だが父はどんなにロクデナシでも被差別村の出ではなかった。普通の性をもっていた。

失明して歩けず十一年間寝たきりで他界した父を、かえすがえすも娘の手で殺せなかったのは残念である。悪夢で

服用後わずか四日で、五行と文字が読めなくなった。百円玉と一円玉の区別がつかない。お金の数えられなくなつたわたしはつり銭で重くなった硬貨入れを首に紐でぶら下げて歩き、スーパーに行くとき、ざらっとレジの前にぶちまけた。いるだけ店員さんにとって貰うのだ。

処方治してくれたのは松山の精神科医であった。笠原師は我々患者がため込んだプロバリンやイソミタールを廊下いっばいに怒声を響かせては取り上げ、不似合いなやさしい声でこうつけ加えた。「もうちょよつとの間じゃ。花火みたいなモンじゃきに、ちくつとの間、我慢しちよつたら死ぬるぞね」

死にたかつたと、母はよくいつていた。昭和八年、母は被差別村に生まれた。実母は五歳で亡くなり、義母は女郎だったひとで旧長浜村でも口をきいてくれる人がいなかった。義母は幼い母にあつた。酔っては殴った。

「おまは魚の腐った眼をしちよる」髪をつかんで鏡の前にひきすえた。覚えていただけのおいたちを母はひとこといっただい。「まっ暗やつた」

父は二十六歳年上、ハデなアロハシャツにサングラス、セーラーの万年筆で贈り物の同人誌に詩を添えた。二人目の妻が籍に残り、あちこちに子供のいる新聞ゴロと知ったのは後のことであつた。結婚できると男なんぞをたやすく

は父が出てくるが、「おとうやんが来る！ はようお金を隠して」と叫んで眼が覚める。枕の下の財布を確かめ、ぐっしよりとした汗を拭って安堵する。ああ、おとうやんはあの世に行つてくれたと思つて、ほつとする。

この頃では大事な母よりも父の言葉を託宣のように想い出すのである。

四万十川の川縁で三歳のわたしはどこかの背広のおじさんのくれた菓子代を素早くひたつた。長く伸びた堤防には牛や馬がいた。パイプをくわえた父は眼に笑いを浮かべていつた。「ひつたくる奴があるか。あんなときはのう、ちいと遠慮してみせるもんじゃ」

メルトダウンの手帳「第一号さんの家は、まだ崩れずに建つていた。「ほうれん草の背が低い。雨が足りん」これは一人言である。

中学を出てから村の電気修理屋に勤めているよしやんは昼飯どきであろう。小屋、いや家に近づく前に、三十数匹の猫たちの発するツンとする臭いが道路までこぼれていた。コンパクトを取り出してお白粉をはたきこむ。中国娘の置き忘れた香水もかけた。

「よしやん、ずずくつた深ネギじゃねえ」

糖尿病の深まったよしやんは腹ばかりふくれているが、歯が一本もない口でラーメンをすすつており、肩に乗つて

わたしのメルトダウン

土佐育ち。母は海辺の被差別村出身。女郎だった義母に虐められて二年間精神病院に入院中、電気をかけられて記憶を失った。

父方は横浜の拜み屋の一族。祖父は旅役者、テキヤ、贋作師、最後は祈祷師となった。父は葛西善蔵に心酔し、同人誌を作って真面目な石鹼工場の友人の人生を狂わせ、妻子を路頭に迷わせた。酒と女とギャンブル、赤いシャツとニセの金のロレックスの似合う新聞ゴロだった。

娘時代は8ミリ映画をつくり、文楽や寄席通いの好きな陽気なおねえさんであったが、両親の死後、突然、うつ病になった。精神病院の誤診と大量処方副作用で、本を五行と読めなくなった。フクシマ3.11以降、東京のアパートはそのままに高知市に疎開。都の障害年金と生活保護を受けている。

尊敬する人はカルメンとマクベス夫人。将来の夢は旅行記を書いて旅ばかりしていきたい。
大阪文学学校卒。

山田まさ子



脳萎縮は、減薬すれば必ず治ります。苦しむあなたは、かつてのわたしなんですから。

この人は女の胸にひき寄せられて、撫でたりさすったりするようなアタマすら働かないのであろうか。わびしさに息が詰まった。
よしやんは直立不動になり、手ははなれると同時にポケットをまさぐった。しわくちゃの千円札と百円玉をありったけ差し出した。
四万十川がにおう。この村ではないのに四万十の風を感じた。ほんのわずかためらってから、わたしは両手でやわらかく受け止めた。

「よしやん、こんなつもりじゃ」「ちいとはかりじゃき、とつておせ。こんげなとこまで、まさこさんが来てくれて」「けんど悪いきに」
これ以上、どうほめる？
仏壇の引き出しから千円札をとつて、またゴミをこえてから差し出した。きつと一万円はあるだろうと、わたしは眼で計った。数年前に手取り七万八千円の給料だときいたことがある。そんな人から取るのであろうか。
「よしやん、こんなつもりじゃ」「ちいとはかりじゃき、とつておせ。こんげなとこまで、まさこさんが来てくれて」「けんど悪いきに」

ラーメンにちよつかいを出す白猫は片眼がつぶれている。他のも耳が聞こえず逃げもせず道路に寝ていたり、妙な歩き方をする。お世辞にもかわいいとは言いがたい。……が、まるで血統書付きのロシアンブルーをみたように、わたしは感心した声をあげた。「おおの、上等の猫さんじゃ」
天井のクモの巣やらゴミやらさだかでない白っぽい汚れは、レース飾りのように幾重にも糸をひいていた。
よしやんはラーメンを胃口に置き、積み上げた生ゴミ袋を踏みこえた。こえた」というのは、床の中央が十数年前から腐つていて、熊がまるまる落ちるほどの穴があいているからである。
戸のない押入れは新聞をしいた猫の寝床で、どこも新聞紙だらけなのは猫がおしっこをするせいなのである。「りっぱな猫屋敷じゃねえ」

五十年経てば、人間、ひつたくりはしない。おずおずとすまなさそうに受け取って、平らなところが無いほどギザギザに爪とがれた柱にもたれた。
昼でも暗い。窓のひとつもない屋敷に裸電球に照らされて反射する瞳、貧相なトラ毛やキジ毛の、野原のごとく部屋を駆け抜ける野蛮な生きものに「元氣やねえ」と声をかけ、ラーメンに前足をつつ込むのに「おりこウじゃ」と重ねた。「ほんに猫さんの天国じゃ」
よしやんは女を知らない。若いときからの糖尿で女体は遠くから拝むものであった。それでも猫の尿ばかりのただよう胃口に、中国娘の香水がぱつと放たれた。よしやんはどこかぼうつとわたしを見上げた。
「わしは仕事じゃ」
古自転車についてさつき来た畑道を歩く。歌うように囁くように、わたしは青年のよしやんが棺桶をかつぐときの常連の力持ちであったこと、村祭りで天狗様の傘をもつ係りにされたことなどしあわせて惨めに思えぬ話題を続けた。
別れ道の小川には黄色い菜の花が咲いていた。何年も会わず電話すらせず一万円はあんまりだとわたしは思った。御礼のつもりで自転車にかけていない方の手をひっぱった。乳房に押しあてる。
よしやんの手は木の枝のように固く何の芸もなく動かないのであった。

受賞の言葉

山田まさ子

ありがとうございます。審査の先生方、下読みして下さった方、編集部のみなさま、おかげ様でりっぱな賞を頂きました。

東京の脳病院でCTやMRI検査の結果、脳萎縮が発見されました。「統合失調症」という誤診で、実際はうつ病でした。

いま、こうして文字の書けるしあわせとともに、まだ多くの仲間が精神病院で誤診や多剤に苦しんでいることを思います。

笠医師のホームページ「毒舌セカンドオピニオン2」の「早期介入阻止行動」の欄に、わたしの綴った記録があります。笠医師だけでなく、大阪の光愛精神病院の島田先生にも減薬していただきました。

精神病院でメジャー薬のてんこもりの処方袋を手によだれをたらしめているあなた、手がふるえてコップを床に落とすあなた、迷子になり警察に保護されるあなた、ええ、よくなりまずとも。お薬の副作用による